

18
785

文學博士 谷本富著

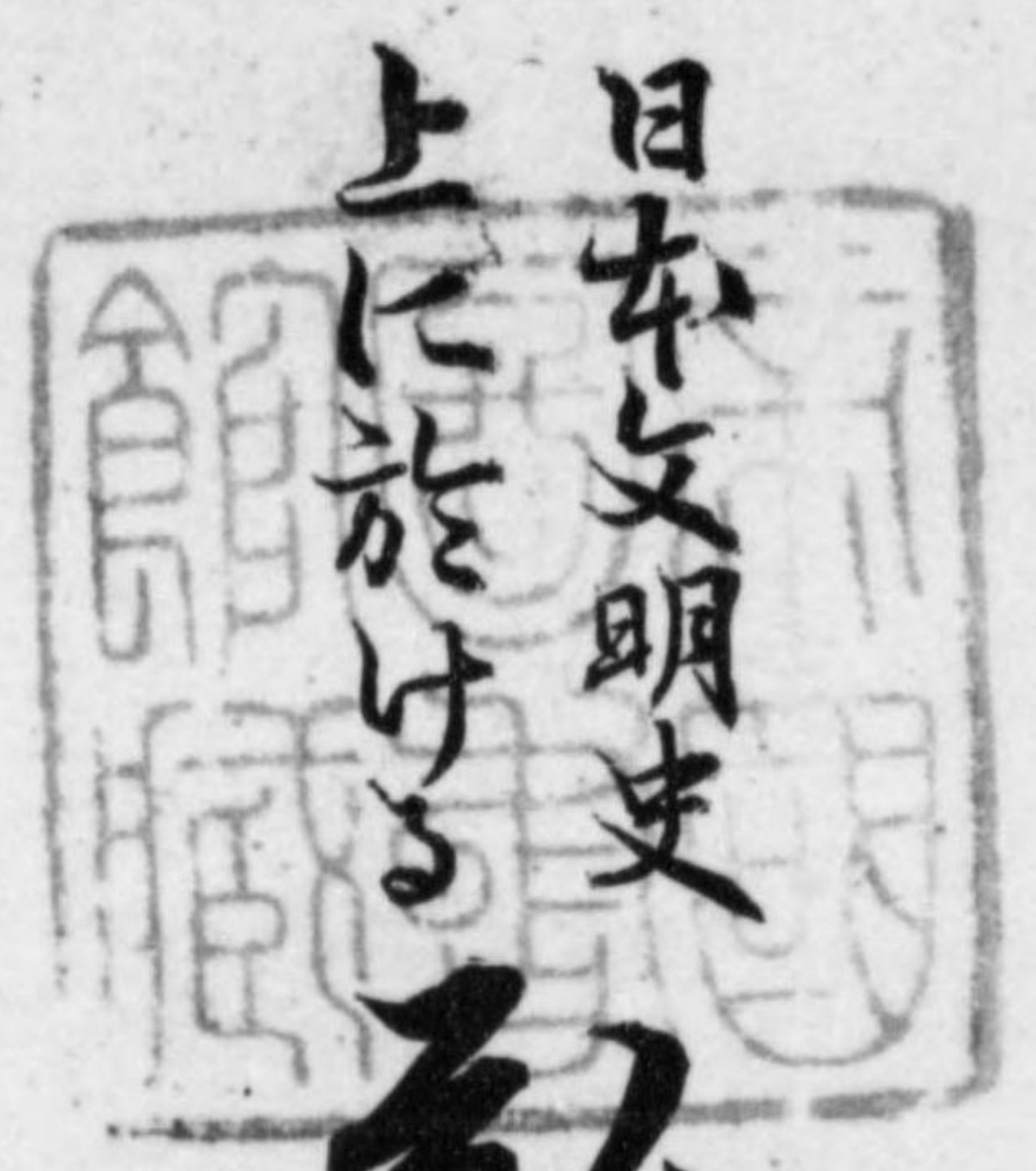
日本文明史
上に於ける
弘法大師

東京

合資
會社 六盟館藏版

18-785

文學博士 谷本富著



日本文明史
上に於ける
弘法大師

東京

合資
會社 六盟館藏版



序言

此の書は本年六月十五日東寺に開催の弘法大師降誕會に於て、約四時間に亘りて講演したる卑見の速記録を、改訂して上梓したるものなり。初め講演の依囑を被るや、余は非常に重責を感じ、能力資力乃至時間の許すだけ、勉強して之れを盡くさんと志し、終に遽に行李を治めて高野に詣て、以て靈跡寶物の觀察を試むるに及べり。奈何せん、講題の範圍太だ廣きが故に、未だ其の萬一をも究むる能はざるを。想ふに弘法大師の事蹟は洵に是れ我が國文化の沿革と相關係するを頗る密なり、學者必ず深く探求せざるべからず。此の書或は一個の津梁舟筏たるを得ば、望外の幸福なり。由りて卷末參考書籍を列舉し、殊に本文と交渉親切なるものは、符號を標榜して索引に便ならしむ。余は茲

に鎌田石堂兩僧正を始め、道俗諸友の援助太だ厚かりし事を伏謝せんとす。尙ほ當時講演の筆記、都鄙新聞雜誌に掲載せらるる多く、就中神戸市に於て發刊する英字新聞「セ、ジャパン、クロニクル」も亦丁寧之れを記載し、終に別冊として刊行するに至りたるは、過分の光榮として深く感銘する所なるを一言すと云爾。

明治四十年十一月

著者識

○少僧正石堂慧猛師挨拶

諸君、之れより京都帝國大學文科大學教授谷本博士の御演説がござりまするが夫れに先立まして一言申述べたい次第がござい升、本日博士が此方で御演説下さる事になりました事に就ては少し事情があります、と云ふのは博士は諸君も御承知でございませうが、我が宗祖弘法大師と同じく讃岐のお生れであります、従つて大師の御事蹟に就ては夙に御承知でもあります、且又歴史上此の偉人に就ては充分御研究を積れて居られる事を承つて居りましたから、昨年實は同博士に御演説をお願い致しました、所が不幸にして其の當時博士は御病氣中でございまして、昨年は遺憾ながら拜聴が出来ませんでした、併し其の約束は略其の當時に成立つて居りましたので、先年の約束を履んで本年三月上旬に復た同博士に御依頼致しました所が、快く御承諾下さいまして、夫れ以來と云ふものは非常な御熱心で、高野山へも御參詣に相成り、其の他大師の遺書などに就て非常な御勉強に爲りました、先日参りました際には、既に大師關係の書

物百卷以上も御通覽に爲つたと承りまし、殊に一部の「文鏡秘府論」などは一箇月以上も御研究に爲つたと云ふ事を承りました、斯様に博士の該博なる智識と緻密なる研究と多様な觀察とに依て、今日の御演説があるのでございますから、其のお積りで御静聽あらん事を希望致します、尙此の會場は天井が低く且廣くありませんが、併し本日御演説に爲りますのは、極めて廣く致して獨り我が日本内地のみならず延いて世界の或る部分までも影響する事と考へます、又此の演説の筆記は一部の書物と爲り、外字新聞にも投せられて、外國の或る部分にまで影響する事と考へます、^二他の思ひ付の演説や俄拵之の演説とは違ふのでありますから、十分諸君に於ても御静聽あらんことを希望致します。

目次

序言

石堂僧正挨拶

序 説	一
第一章	言語學上に於ける弘法大師	一三
第二章	文學上に於ける弘法大師	二七
第三章	美術上に於ける弘法大師	三七
第四章	書道上に於ける弘法大師	四七
第五章	宗教上に於ける弘法大師	五四
第六章	哲學上に於ける弘法大師	五九
第七章	教育上に於ける弘法大師	六三

第八章 經濟上に於ける弘法大師……………七二

第九章 弘法大師の境遇……………七八

第十章 弘法大師と奇跡……………九一

結論……………九七

引用書目略

日本文明史 弘法大師 上に於ける

文學博士 谷本 富講述

序説

諸君、本日は如何なる吉日でございませうか、屈指致しますれば今日より正しく千百三十四年の昔即ち光仁天皇の寶龜五年六月十五日南海道讚岐國多度郡屏風ヶ浦に於きまして、吾々の平素敬信し奉る眞言宗の開祖弘法大師空海和尚が呱呱の聲をあげられたる日でございませう。而して又偶然ではございませうが、今日は恰も陰曆の端午に當ります、舊曆五月五日の祝ひ日でございませう。此の目出たき日に於て、斯く多人數のお集りを得て以て此の會を開くと云ふ事は如何にも目出たう存する事でございませう。で承れば此の降誕會と申す事は昔からも御座りました事ぢやさうで、唯だ其の名前は降誕會とは呼んで居なくて、

昔は誕生會と謂つたさうですが、お宗内では夙に莊嚴なる祭式が擧げられて居た事と承りますが、時勢の進歩に伴れて此處十年前から降誕會と改められまして、年一年斯く盛大に爲ると云ふ事は、我が國運の進歩に伴つて、宗運も亦日に月に隆盛に赴ける證據であつて、格別に慶賀すべき事と存じます。

さて私が此の演壇に立ちまする由來に就きましては只今發起人石堂僧正より致されまして精しくお述べに爲りましたから、私は再び繰返す必要はござりませぬが、先般石堂君が此の演説を私にお頼みになりました時の御口上では、大師と私とは御同國ぢやによつて忙がしからうけれども一番奮發して遣つて呉れと云ふ事でござりました。固より私は讃岐高松の産れで弘法大師とは御同國には違ひござりませんが、併し凡そ物の比較も品に依りけり、そりやあ随分誰れ其れと同國じやと云ふ事は人の口に致す所でござりますけれども、何うも弘法大師と私とが御同國でと申すのは、何だか釣合が取れぬ様に思はれ升（哄笑）弘法大師は成程讃岐にお生れになられたけれども、斯りや日本の偉人たる弘法大師であり否、世界隨一の弘法大師でござります。私共は凡人で極く些細な人

間の事でござりますから、何うも弘法大師と御同國であるから、演説をお引受け申すと云ふことは、私の方からは毛頭申されないのであります。然らば何故に此の演説をお引受けしたかと申しますと、斯りや何だか私が平素眞言宗の事に就て十分取調べた事でもあるから之れを開陳する爲かと申しまするに、決してさうではないので、先刻佐伯文學士よりもお話になりました如く私は元來眞言宗の信徒ではござりません、私の家は眞宗であります、是れは茲に公言致し升。尤も讃岐には眞言宗が多くあるものですから、私も早くから此の弘法大師の御遺徳に接する機會を多く持つた者であつて、私の子供の時分には無量壽院と申しまして、之は今日は高野の別院に爲つて居りますが……其の無量壽院で眞言宗の説教を聞いた事もありません、或は大護寺と申しまして眞言律のお寺で數々法會に列席した事もござります。尙ほ其の外考へて見ますると、丁度私が八ッ九ッの頃でござりましたが、明治八九年の頃でもござりましたらう、大師の事蹟を芝居に仕組んで彼方此方で興行する事が流行つて私も見に行きました、其の時甚く感動した事がござりますが、其の後東京に出て書生を致して居りま

する間にも又故の助高屋と云ふ有名な俳優が弘法大師の御事蹟を仕組んで遣りましたのを觀まして、今も猶ほ此のお話をして居る前に其の面影がチラツク事でございます。さう云ふ譯でございませうから、お寺以外にも亦大師の御事蹟に就ては多少承り居るものでございます。けれども眞言宗の事は素より毫も承知致して居らぬので御座いますし、別して此のお宗旨では師資相承と云ふ事が大變喧しいと承つて居りますが、私の如き相傳も口傳も何もございせん者には、其の秘密の教軌や事相の上に就ては一言半句容喙する權利のない筈でございませう。然らば何故に此の演説をお引受けしたかと申しますると、私の専門は教育學です。先刻佐伯君のお話では何だか私が歴史家でゝもあるかと云ふ様に聞えましたが、私は教育學者なんである、自分の口から學者と云ふと可笑しいが、兎に角私も教育學者の片割であるのでござります。所で教育學の上で弘法大師と云ふ者を吾々はドウ見て居るかと云ふと、吾々の考では日本古來の教育史上に於て第一に指を屈す可きは即ち弘法大師であると云ふ事を平素風に唱ふるのでございます。従つて日本教育の歴史を明かにせんが爲め、昨今弘法大

師の事に就て些か研究した事がないでもございませぬから、今日はそれを一つお話して見やうと云ふ譯であります。其處で演題も亦彼處に掲げてございませう通り、「我が國文明史上に於ける弘法大師の位置」と云ふ事でお話を致す積りでございませう。

従つて又今日弘法大師の御事蹟をお話致しまする場合には、往々呼捨などに致す事などもございませうが、之は一々敬語を使ひますると、舌がもつれて話が十分に出来ませぬから、簡略に呼捨にする事に成るのでございます。併しそれは少しも大師を侮辱する意味はありませぬ、心では十分に敬禮を表する積りでございますから、豫めお斷りを致して置きます。尙ほ今日の講演は歴史の研究でございませうから、専門外の私共がたとへ弘法大師に對して、何うも左程エラクなさ相なと云ふ様な事を申しまして、少しも弘法大師には痛痒を感じられん事と存じます。又お宗内の方々はどうも教育學者が教育の立場から聖僧を演壇で罵ると云ふ様な事は、大不都合じやお叱りもござりませうが、併しながら之は専ら研究の上から申すことで、決して大師の盛徳を傷付ける事はな

い等でございます。此事は吳々も豫めお断りを申上げて置きます。尙ほ本題に入ります前に、先づ文明史上に於ける弘法大師の位置と題しました上は、文明史と云ふ事に就いて少しくお話をするのが順序であると存じ升。借普通には文明史と一口に言ひ、文字に書いて見ても唯だ三字です。が併し此の文明史とは何であるかと云ふと凡そ文明史の解釋に就いては學者諸先輩も頭を悩さるのでございます。即ち現今塊地利に於て有名なる哲學者ヨドルと云ふ人がありますが、……私も先年彼方で其の講義を聞いた事もございますが、……ヨドル教授は曾て文明史と云ふものを數種類の看方に分けて講述せられたところがあり升。で私の茲に所謂文明史はドノ種類に屬すかと申すと、それはなかなか難問で、此文明史の性質に就て詳細にお話をすると云ふ事に爲りますと、とても二時間や三時間では濟まぬ事に成り升。で今日は夫が主なものではないのですから、読んで字の如く只文明の歴史と云ふ事にして置ませう。然らば又其の文明と云ふのは何であるかと云ふ事を簡短に申して見ますと、此の文明と云ふ文字も亦甚だ喧しいもので、何をか文明ぞと云ふ題を出されたならば、

それに答へる事は餘程難しいのです。併し之も手取早く解しやうと思ふと又直ぐ解せられぬのでもない。即ち文明と云ふ事は英語のシビリゼーション或はカルチュアに當り、又獨逸語のクルツールに當るで、ツマリ文明と云ふ事は、吾々人間と他の動物と區別さるゝ所以でございます。人間も極く野蠻の時代には……只今は人間は萬物の靈長など、云ふけれども、萬物の靈長と云ふ言葉は餘程社會が進み文明が進んでから出來た事で、……他の禽獸と大なる差違はなかつたのでございます。それが年月を経るに随つて知らずくゝの間に雙方に差違が出來て、終に萬物の靈長と云ふ境界に達しましたが、其處に始めて文明が判然と現はれたのでござり升。然れば今茲に我國文明史上に於ける弘法大師の位置と申す時は、應て此の弘法大師が遠く千有餘年の昔に於て我が日本國に出來て、偉大なる力を以て、吾々日本人の祖先を如何に禽獸界より遠ざけて下さつたかと云ふ事を研究する譯になり升。尙又之れに就てモウ一つお話をしなければならぬ事は、等しく文明と申しまするが、此文明と云ふ事には元來二通りある様に思ふのであります。夫れを一々分析して申すと長くなりますが、先づ簡

短に言ふと、文明に二通りあつて、其の一つは其の國土に於て自ら起る所の文明……吾々は之れを名付けて創造的文明と云ひます、即ち其處に始めて造られたる文明であります。夫れからモ一つは自分の國でなくて隣國なり、遠國なり、ツマリ他所から輸入して來た文明……吾々は之れを名付けて傳承的文明即ち他所から傳つて來た文明と申します、其處で即ち世界中の文明を總觀すると、創造的文明と傳承的文明との二つに分かれるのであります。尤も之れを精細に詮索すると、全くの創造的文明と云ふものもなければ、全くの傳承的文明もある譯ではなく、互に交通して互に開け合つたものじやから、全く一方に偏した文明があるべき理由いはいはございませんが、大體申して見ると、印度の文明は印度の國土に起つた文明である、又た埃及の文明は同じく埃及の國土に起つた文明で、支那と云ふ國の文明も亦た支那の國土に起つた文明でござります。さうして見ますると云ふと、言はゞ印度、埃及及び支那のは同じく創造的文明であります。所が之れに反して我が日本の文明は如何であるかと云ふと、固より國體の精華は之れは日本固有の美風で日本國土本具のものとして存じまするが、其餘の

文物は、奈何せん始終異國より輸入されたのであり升。先づ最初は朝鮮(三韓)の方から、其の次は支那の方から、其の次は印度から間接に參りますし、終に近頃には及んでは歐羅巴乃至亞米利加の方から追々文化が這入つて來ました。して見ると如何に瘠我慢を張つて見ても、我が日本の文明は他所から借りた傳承的文明に違ひないのであり升。諸君、何うも夫では困る話でありませんか、言はゞ借錢をして居るやうなもので、それでは一向日本は一等國じやと云つて威張れず、朝鮮人だの又は支那人印度人乃至歐米人にも、彼方へ行つても、此方へ行つても、借錢だらけで頭が上らぬ筈です(大笑) 所が實際はさうでは無い、借錢にも二種ある(哄笑) 一つは自分が放蕩して首が廻らぬ様に爲るから彼方此方で借りて來て、而して遣り繰をする、其の金が無くなるとモウ八方塞がりだ、仕方がないから逃げ出すと云ふ性質の悪い借錢と、他の一つは資本を外國から仰ぐので、外國の資本を日本に輸入して商業なり工業なりを盛大にすると云ふ性質の善い借錢である。同じく借錢するにも此の二通りあるとすれば、文明の傳承も亦さうであつて、我國の如きは從來夙に外國より資本を續々輸入し、其の

資本を旨い具合に使つて商工業を發展せしめた様なもので、其の結果只今世界の一等國に列して、他國に比して恥づる處がない程に成つたとして見れば、何にも吾々は嘆息する所はなからうと存じ升(拍手) 確か『大阪朝日』でありましたか先日斯う云ふ事を書いてありました……私は毎日朝起きると何より直ぐ新聞を見るですが、件の論文を見て甚く感服致しました……それは他所から文明を持つて來た所が、日本が若し悪い土地であつたならば、其の文明が日本に於て一層發達しやう筈がない、所が日本は非常に好い土地であるから、人間の身體で言へば、何んなものを食べても腸胃が極めて健康であるから、直ぐに消化をして仕舞つて沈滞する所がない様に、外國から來た物も悉く消化して自分の者にして仕舞ふのであるから、決して耻づる所はない、威張つて宜いのだと云ふ風に書いてありました……私は此社説には双手を舉げて賛成を表するのでござります。』

斯く日本の文明は傳承的文明であつて、他國から借りた文明であるとする、それで以て略ぼ弘法大師一生の事も解るのであります。弘法大師は我國の文明を創造された人と云ふよりも寧ろ大陸の文明を日本に受け傳へ輸入をされた事

に於て偉大なるお人であつたと申したからとて、少しも差支はなからうと思ひ升。従つて今般六大新報社より「學者より見たる弘法大師」と云ふ發問があつたのに對しまして、私は斯うお答へをしました、即ち「弘法大師は不出世の才人である、當時大陸の文化を將來して後昆に貽すの功、誰か之を偉とせざらん」とお答を致した。何處までも大師は大陸の文明を日本に輸入したる非常の大手腕家である事を此處でお話し仕様と思ふのです。で之れから本日の講話に入るのではありませんが、即ち大師は其の文明をどう云ふ様に輸入されたのであるか、又大師は夫を何う消化されたのであるか、何う活用されたのであるか、此等に就いて一々お話をするのが、本日の主眼でござります(拍手大喝采)

併し今見受けまします所、色々のお人がお集りに爲つて居るので、誠に話が致し難いのであり升。今日のお話は今石堂君からお述べに爲りました如く、私は一體直ぐ出鱈目に話するのは極く嫌ひな性分でもあり、且つ前から長くお頼みに爲つて居た事でもございまかすら、緩(ゆる)くり取調べた事を申上げるので、全く學問上のお話なんです、それを俗耳に面白く聞える様にすると、肝腎のお話が

おツヤンになる。さればと云つて又學問上の話許りでは退屈であらうから、そこは幾分か滑稽調の事も申す様に成りませう。さすれば肝腎耳を掘り立て、ござるお宗内のお人々に對しては甚だ失禮に爲るかも知れん、私は實に今困つた位置に立つて居るのです(笑)で矢張り學問の方を主に致しませうから解らなければドシ／＼退出して下さい、構ひません。又ドシ／＼欠伸もして下さい毫も苦しうございませぬ、私は勝手にドシ／＼お話を進めませう……と云つても併し何うも何ですネ、實に困るのですネ、お見受申す所、お宗内の大徳方もござれば大中學の學生もある、又稀には十歳位の子供も居られると云ふ有様ですから、如何に言つて見ても致方はありません、まア宜しい、お話し致しまするから、貴方がたの方で解らん所は眠つて過ござれても宜しいです。(笑聲盛に起る。拍手大喝采)

第一章 言語學上に於ける弘法大師

さて第一番にお話しまするのは、語學の上に於て……言語學上に於ての弘法大師の位置と云ふものであり升。何故言語學の上に於ける位置が初めとならば抑々人間と禽獸とを區別する第一のものは言語であるです、牛はモウ／＼と云ひ馬はヒン／＼と云ふ、之は物を言ふのではなくて鳴いて居るのである、人間と禽獸との區別は其處に在る。即ち吾儕人間が互に意思を通じ智慧を交換すると云ふ事は、此の口と舌とを動かす事に依て出来るのである、斯りや人間でない出来ぬ、萬物の靈長たる所は即ち此の舌にありと云つても敢て差支なからうと思ひ升。其處で言語の能く通ずるもので智識の廣いもの程文明に接觸する事が多いのですが、今日は世界が廣く爲つて弘法大師誕生當時よりは言語の數も太だ増したらうけれども、大師當時を回顧して見ますれば實に大師程博言宏辭の人はなかつたらうと思ひ升。大師程に廣く言語に通じた人がなかつたとし

ございませんか。御承知の通り我が國が外國と交通しましたのは、最初は三韓と交通したのが始めでございます。が既に三韓と交通をしますれば必ず三韓の言葉を習はねばなりません。其處で此三韓の言葉を用ふる爲に譯語と云つて翻譯を掌る人がありました。『日本紀』や『姓氏錄』を見ますると譯氏と云ふのがあり升、夫はオサウ、ウ、と讀んで有り升、即ち朝鮮の言語を翻譯する人があつたのです。夫れから朝鮮に引續いて交通したのは支那であるですが、夫が始めて交通して以來、隋唐宋と云ふ方に涉つたところでありますから、又た言語學の上にも色々變化を來たしました。即ち我が國へは朝鮮語の次に支那語が這入つたのでございませぬ、此支那語には御承知の通り吳音と漢音との二つございませぬ、其の吳音と漢音とは孰れが先に參つたのであるか、孰れが後であるのか、學者間の研究は未だ定りません様でございますが、自分の考へる所では大方吳音が先であつて、漢音が後であつたらうと思ひ升、所で之れを古い歴史に徴して見ますると、例ば昔の制度を書いてある『職原抄』と云ふ本などに據りますると、當時大學に……京都にありましたる大學には音博士と云ふ者があつたのでござ

います、そして法律を習ふ人でも或は儒學を習ふ人でも、明法明經孰れの途へ行くにしましても先づ音を習て置かないといけなと云ふので、音博士と云ふ者がありました。丁度今吾々が専門學を勉強致します前に、外國語を遣つて行かなければ、本當の修行は出來ないと云ふのと同じであり升。所が先づ昔の人でも矢張同じ事と見えて、兎角物事は手取早いのが宜い、音なんぞ勉強せんでも宜いといふ風であつたと見えて、延暦の十一年には夫が爲に殊に詔勅が出て今の大學の學生共は兎角音を疎略にするから間違が多い、是非共音を勉強せんといかぬと云ふ仰せ出されました。今日の大學生も亦兎角語學の素養が足らぬ様で吾々は始終言ふ事ですが、まア何をするにしても歴史を遣るにしても哲學を遣るにしても矢張語學を先に勉強せんといかぬと申しますが、昔も今も同じ事と見えます。即ち延暦の十一年の格には又凡そ學生は單に書物を讀む丈で話しか出來んでは困るから、是非共音を習はなければ爲らぬと云はれてあります。が、同じく『延喜式』を開て見ますると、漢語師と云ふのがあつた、即ち漢の言葉の師匠で、それに就いて習へば支那人と會話の出來る學者と爲る筈です。さう

云ふ様に延暦の頃には頻に支那の語學を勉強する様に奨められてゐる。而も斯の如く帝室からも特に御心を付けさせられたのにも拘らず、何うも人は勉強するのは厭いやなのか、夫れとも何か都合の悪かつたのか兎角語學などは勉強せん人が多い。其の一例は大師と前後して出た人に就いて見れば分り升。其の人も亦一宗の開祖とも認められて居る偉人であり升が、それは誰であるかと申したならば、申すまでもなく我が國天台宗の開祖傳教大師最澄和尚の事であります。今日此の眞言宗のお集りて天台宗の開祖の事をとやかう言ひまると、或は何か私が故さらに眞言宗を譽めて天台宗を誘ふかと云ふ様に聞えるで迷惑致しますが、決してソナア積りはないので、唯だ有の儘に事實のお話をするのでございませぬ。勿論傳教大師と弘法大師と孰れが優、孰れが劣と云ふ様な事は吾々小子後生が妄に喙を容るゝ事は出来ないのであり升が、唯だ歴史上から申して見ますと、傳教大師は取調、べの爲に支那に行かれた方で、又弘法大師は留學生として行かれたです。で傳教大師が支那に行かれやうと云ふ時に方りて、特に表を上つて申されるには、臣最澄は未だ漢音を習つて居らない、其處で支那へ行つて

も珍紛漢紛で何の事か解らぬ、幸ひ弟子に義真と云ふものがあつて、之れが能く漢語を習つて居るから、其義真と云ふ者を伴れて參りたい、獨り參つても話が出来なければ、宗教上の取調を遂げることにはむつかしい、其處で今で言つて見れば通譯掛、翻譯掛と云ふ様なものでございませうか、兎に角弟子の義真を通辯として伴れて行きたいから、此儀何卒お許し下さる様にと願つた、尙又支那に行きましても長く言語不通の地に止つて居る事は不便の事が多いから、後の詳しい所は留學生に任して置きたいといはれました所が、天皇より詔があつて夫で宜いと云ふ事に爲りました。其處で傳教大師は義真と云ふ若い人を伴れて行かれました。所が弘法大師の方はさうで無い、人の通辯を假らない、自分に通辯が出来から通辯の必要はなかつた。實はこれだけで彼の國へ行つてからの活動の模様も自ら解るです。斯う云ふと或は天台宗のお人には失禮かも知らぬが、何うも弘法大師の方が傳教大師よりは外國で活動が仕易かつたに違ひないと思ひ升。其證據は即ち又其頃の支那の歴史を見ると直ぐ解るです。『新唐書』などを見ますと、日本の留學生橋逸勢、僧空海と云ふ此の二方の名前は載つて

居るけれども、最澄と云ふ人の名前は毫も見えて居ないので解る事であらうと思ひ升五。尤も此史實には解釋の仕方が別にございませう、即ち空海、逸勢の方々は長安の都に這入つたから歴史に載つて居るのであるが、最澄は直ぐ天臺山に上がられ長安の都へは這入られなかつたから、彼の國の史家などに知られなかつたと云ふ解釋も出来るのでござい升。併し夫は扱置いて何はともあれ最澄と云ふ人は支那へ取調べに行かれたのであり、空海と云ふ人は留學に行かれたのであるとすれば其處に自ら別がある。今日でも取調の爲め何處其處へ派遣を命せられると云ふと大變聞えは好い、留學生だと云ふと何だか三十面提げて留學と云ふのは可笑しいと、斯う云ふ様に解するのが今でも凡夫の情なんだが、之れは私は自分留學生として行つて居つたので辯護するのでも何でも無いのであるですが、留學生だと勢ひ外國に長く居るです、通辯などを假る事はしません、専ら自力で勉強をするのです、従つて素より相應に言語も出來て十分取調も出來、大家の講釋なども親しく聽けると云ふ譯です。所が取調の爲派遣せられた人などは或は彼方へ行つても此方へ行つても一向耳も口も利けないか

ら困る、中には留學生などに、「君、日曜で暇なら一寸通辯を遣つて呉れぬか」何處へ行く」「今日は陶器試験場を見るのだ、明日は織物製造場へ行く」「左様か、承知した」と云ふ風でどうかかお茶を濁して居る。併し留學生とても素より其向の事に對しては一向不案内な譯だから、随分間違つた説明などをする事ともあらう、夫れを取調べが出來たと云つて日本へ戻つて來て堂々と報告をすることに成る、其の報告は實に空中樓閣なのが多いさうだ。其處でチヨツと派遣と云ふと、ドエライ様なもの、其實は全く留學して來いと云はれた方が有難味があるのであります。其處で私は竊に考へるのに、此の最澄と云ふ人も固より豪い人物ではあるですが、空海と云ふ人とは學問の上に於て、否、語學の上に於ては幾分か優劣がありはすまいかと思ふのでございませう、此處は幾らかと申します、丸でとは申しません。(拍手)さて大師は斯様に支那語が出來た、……朝鮮語はどう知らんが……で其の次に習はれた外國語は何であるかと云ふと、如何に大師でも、英語を話された、佛蘭西語を話されたと云ふ事は聞いた事はない、(哄笑、拍手) そりや大方御存知なかつただらう。大師の次ぎに習はれた言

葉は全く印度の梵語でございませう。諸君、此の梵語と云ふものが日本に這入つた事につきましても、亦誰が元祖であるかと云へば、私は寧ろ弘法大師を推さんとするのであります。固より大師以前にも梵語は多少行はれて居つたとは思はれますが、大師に至つて始めて完全に爲りましたらうかと思ひ升。之れは書物の上に歴々と現はれて居る事で、其の一例を申して見ますと、即ち夫の貞享年間に出來ました、『悉曇三密抄』と云ふ本の序文を見ましても、悉曇が這入つたのは最も大師の將來を承けて出來たのであると云ふ事が明かに云ふてございませう。勿論此の書物は史料として必ずしも十分價值のあるものとは思ひません、遙に後世の作で信頼する事は出來ませんが、併し字音即ちサンスクリットが日本に這入つたのは、大方弘法大師が元祖である事は殆んど疑ひないと思ひ升。即ち大師が書かれた『悉曇字母並釋義』と云ふ一冊の書物がある、夫れを讀むと尤もだと思ひ當る節がありませう。勿論其の悉曇字母など云ふものは、今日の目で見ると………密教の秘密義は別ですが………唯語學の上から見たらば、餘まり發達したものとは云へない様です。承れば、悉曇と云ふは悉曇章の略で、

サンスクリットの文典が十二章ある、其の第一章の、成就吉祥章とか云つて、言はゞマア今日のスペルリングブックとか或はプライマーとか云ふ様な所を取つたので、サンスクリット入門と云ふ事は免れん様であります。今日のサンスクリットの辭書には千頁餘の大冊子のもがあるが、大師のは紙數僅に二十枚三十枚のものであるのを見ても大方分からう。が夫れ位のものであるのですけれども、兎に角サンスクリットを弘められたと云ふ事は、弘法大師の我が文明史上に於ける位置としては第一に特筆大書すべき事でございませうか。勿論斯りや只語學の上からして大師の事を述べるのであり升。従つて宗旨の方では色々深密の意味があつて、其の釋義を見ても私共は頓と解りません、餘程神秘な様でありますが、兎に角私はサンスクリットと云ふ者が、系統的に整然と我が國に輸入されたのは、大師の力であると云ふ事を先づ第一に申すのでございませう。

然り而して尙之れと關聯して日本の國語發達上に於て今日殊に諸君に申したいと思ふのは、夫の五十韻の事です。小學校の一年生から習ふて居る夫のアイウ

エオ、カキクケコと云ふものは、誰が拵えたのであるかと云ふと、私の考では是れ亦矢張弘法大師がお拵えに爲つたものであると云ふ事を申すのでございます。すると諸君は、おヤ／＼そりや大變である、之まで通例言ふ所では片假名と云ふものは吉備大臣が作られたもので、同時に五十韻も編まれたのであると傳へられてあるが、そりや存外な新説じやと言はれるだらう。如何にも私は今日新説を申すのでありますが、茲に其の研究の手續をお話せんと解りません、第一吉備大臣が片假名を拵えられたと云ふ事柄は極めて怪しいのです。尤も吉備大臣と云ふ人もそりや豪い人で……勿論僧ではございせんが……傳教弘法と相並んで行く程の豪い人である事は疑ひはない。併し幾ら豪いからと云ても何んでも彼でも皆出来るもんではない、私は何うも吉備大臣が自身で片假名を作られた者とは思はれない^(一)。凡そ片假名の由來に就いては二つの説があるのです、即ち先づ通例人の説くところでは片假名は昔の萬葉假名の扁^{ヒラ}か或は旁^{ツツ}かの片一方を取つて拵えたから、之れを片假名と云ふのじやと斯う云ふ解釋は普通に言ふ所でありませぬ。夫れは又何う云ふ書物に出てあるかと云ふと、即ち倭片假字反切

義解』と云ふ書物に出て居る。所が近頃爲つて夫の伴信友と云ふ人が出て來た。此の人は廣く日本の語學を研究した人でありませぬが、此の人の著した『假名本末』と云ふ書物が二冊ある、其の中に天平寶字と云ふ年號、即ち孝謙天皇の奈良朝時代でありませぬが、其の天平寶字の五年に書かれた書物に『最勝王聊簡略集』とか云ふのがある、其書物を開けて見ると、本文の横の振假名を今の片假名で書いてある、ところで伴信友の説に依ると片假名は萬葉假名の扁や旁の片一方の義では無うて、元來本文の片側に書いたから、片假名なんだらうと云ふのであり^(二)。併しそれは暫らく何方でも宜しいとしても、兎に角天平寶字の昔に既に片假名があつたとしますれば、吉備大臣が拵つたと云ふ説は破れて了ふではございませぬか。私は實は之れは大方斯う云ふ事だらうと思ふのです、其の頃の人が夙に萬葉假名を片假名にしたり或はそれを潰して扁の一方なり旁の一方を取つて色々様々に勝手に書いて居つて別に定まつた所は無かつたのを、それを吉備大臣が出て、之れでは何うもならぬと云つて統一論を唱へて、略今の片假名の體裁に一定したと云ふ事なんであらうと思ひませぬ。又五十韻の圖に就て

は、之れにも二つ説があるのでございます、一つは吉備大臣が支那へ行つて王化と云ふ學者に就て、反切の講釋を聞かれ我が國の音韻の事も話された所、王化は早速筆を執つて書いて呉れた、夫れに基いて五十韻圖が出来たと云ふのが通例の説です、即ち『同文通考』などには其説を採用してあり升^(三)、また一説は昔欽明天皇の御宇に對馬の國に尼さんの法明と云ふ人があつて、其の法明と云ふ人が始めて此五十韻圖を作つた、依つて五十韻圖の事をまた對馬いろはと謂ふとの説もあるのです^(四)、此法明は大方朝鮮人で、それより以前三韓には早く韻圖があつた者と想像せられる、で元來此の五十韻圖は夫の『韻鏡』等にある反切と能く似て居るのでありますが、併しそれよりも之をサンスクリットの開卷第一に比べて見ると、ヨリ一層適切であつて殆んど符節を合す如くに合つて居ることを認めます、固よりサンスクリットと我が言葉とは違ひまするし、また我が音韻の方が数が少なう爲つて居るが、併し殆んど同じである、尤も吉備大臣は博識家でございますから、或は早くサンスクリットを習つて居られたかも知れぬと思つて、私も色々の書物を讀んで見ましたが、何うも吉備大臣がサンス

クリットの學者であると云ふ事は文書上では今日まで未だ發見せられぬのであります、夫から今度は又吉備大臣に音韻學を教へたと云ふ王化がサンスクリットを知つて居つたかと調べて見ましたが、それは今日只今まで未だ確とは解らないのであります、で宜い加減の説は除けて置いて手つ取早く言つたなれば、始めて廣くサンスクリットを研究された弘法大師が、また五十韻圖を案出されたのであると云ふのが、寧ろ考へ好くはありますまいか、斯りや臆説ではありますけれども、諸君に殊更にお話致して置きます、尤も此の説は私の新説だとは申しません、故の黒川真頼と云ふ文學博士……が私も曾て講釋を聽いた事のある此の老先生が、曾てさう云ふ事を或る雜誌に述べられた事を耳に狭んで居りましたから、古い雜誌を彼此探しましたが、京都帝國大學は創立以後まだ日が淺いから、古い雜誌類は充分具備致して居りませんが、今日まで目つきかりません、黒川さんは何う云ふお説であつたか知りませんが、私の新説と申す所は、黒川さんのものを讀まれた所が夫より外の理由は付いて居るまいと思ひますから、黒川博士を假に其初めの主張者として置いて賛成致します^(五)、否な夫の『文藝

類纂』の著者たる故の榊原芳野と云ふ學者も同書の中に五十韻圖は恐らく弘法大師以後であらうと云つてあり升（さき）が、兎に角私は吉備大臣説を廢して五十韻圖は弘法大師が作られたものであるといふ事を此處で改めて明言致します、而して見れば弘法大師は日本の言語學の上に於て第一に特筆大書すべき人であるといつても差支なかうと存まじす。（拍手）

第二章 文學上に於ける弘法大師

さて言語の話をしまずと、其の次に起るものは即ち文學であります。それは何故かと云ふと、凡そ言葉で以て思想を交換する事が出来ても、筆を以て書かなければ未だ遠方に傳へる譯にはいかず、又後世に傳へる譯にもいかぬ、其處で自ら字を書くこと云ふ事が必要に爲るのであります。牛馬未だ（一）と云ふ字を書いた事もなく、未だ天地と書いた事も見ない、（笑）文字を書くこと云ふ事は全く吾儕萬物の靈長たる人間專有の仕業であると云ふ事は明なのでございます。果して然らば文字、文學の上に多く力を盡した人は又やがて文明史上に立派な功績がある人である事も御異論なからうと思ひ升。總じて極く古は文字と云ふものはなかつた、文字がないから文學と云ふ様な者も起らなかつた。其處で夫の『古事記』にして見ても『古語拾遺』にして見ても、昔からの事は何でも只管人々の暗誦に依つて口から口へ傳へたもので、それは西洋でも希臘のラップヂストなどに同例があります。昔の人は實に暗記力が強かつたものと見え升。諸君は或

は私が二時間三時間饒舌つても草稿を一枚も見もせんから、谷本は實に記憶が宜いと云ふかも知らぬが、(笑)昔の人は決してそれ所では無い。神武天皇ころか神代からの事を悉く記憶暗誦に依て後世に傳へたのです。私のは只大師さんの事が記憶に這入つて居る丈なんで比較に成らぬ。さう云ふ様に昔の人は、何でも言語で口と耳と相傳へて居つたのであるが、其の後に文字と云ふものが出來た爲に、書いて残す様に爲つたのです。で、最初に這入つたのは漢字、漢文である、漢文は何日頃書かれ始めたかと云ふに、それは當初歸化人の書きましたのは別として、日本人で立派に漢文を書かれましたのは、佛法傳來の大恩徳者たる聖徳太子であるといふ事は、諸君も既に御承知の事です。其の聖徳太子が書かれた伊豫の道後の温泉の前なる湯の岡の碑文と云ふのがあります。併し今は残つて居らないですが、俗説に依ると或は残つて居るだらうと云ふ者もある、其の道後の湯から東の方に、私も少年時代に松山に遊學中は數々遊びに行つた所ですが、義安寺と云ふ寺がある、御列席の和尚さんの中には定めて御存知の方もあるでせうが、義安寺、瑩と云つて、瑩の名所で大きな瑩が居る、

「たるはたる！頭の光る義安寺！」と云つて子供も知て居るが、其處に秘佛さんがある、眞言宗の寺には秘佛さんと云ふものが往々ありますが、其の義安寺にも本尊は秘佛としてある、それが即ち湯の岡の古碑であるといふ事で、私は子供心に見たうて堪らなんだ、未だ拜んだ事は無いが、多分虚説と思はれるけれども、一つ秘佛取調掛を置いて調べて見たら何うであらうか、固より吾々は俗人だから、畏多くて出來んが和尚さん方がお経でも讀んで謹んで開扉をして十分に取調べたら至極宜い事でせう、此の事は私は三十年來常に思つて居る事でありませう。さて其の湯の岡の碑文と云ふものは漢文であるが、夫と前後して聖徳太子は又憲法十七箇條と云ふものを自ら筆を執て書かれました、其の事は歴々と『日本書紀』にも書いてあります。さうして見れば漢文は聖徳太子が始めであるとしませうが、然らば漢詩は誰が始めであるかと云ふと、大友皇子である。今日では諡を弘文天皇と申されて、畏くも夫の三井寺の傍なる長柄山崎の陵に葬られて居玉ふのでございませうが、此のお方が漢詩の元祖であります。其の證據は日本で詩集の始めである『懷風藻』と云ふ書物を讀んで見ると、最初に大友皇子

の詩が出て居ます。所で『懷風藻』の後に日本人の詩文を集めたのは『本朝文粹』と云ふ物であるが、是れは弘安年中に出来たので、それには大師の御作はない、併し實はそれより前に大師御在世の時に早く、『經國集』とか『凌雲集』とか云ふものがあつて、幸に只今も殘篇が『群書類從』中に收められてあります。件の『經國集』の中には大師の詩が七八首收められてあります。夫から又大師一家の詩文集としては、御入定後に編纂に爲りました所謂『遍昭發揮性靈集』と云ふものがある、これは立派な書物でございます。で右の『經國集』なり又『性靈集』なりを拜見して見ますと、大師の詩文に於けるお手際は、確に其當時に於ては實に名人であつたと云ふ事を認めなければなりません、尤も大師が古今我が國作家の中で一番上手であつたと失禮ながら申されませぬが、併し大師の詩文に能く熟達して居られた事は優に名人の域に入られた者であります。千有餘年前の出世だが、是れ位漢文に熟達した人は明治に爲つても恐らく多くはありません。氣の毒ながら明治の今日傷の無い漢文を書ける人は太だ少ない、貴方がたの中には或は出来る方があるかも知らんが、恐らく殆ど無いと云つてもよからうと私は信じます。

(拍手)

併しマア詩文は大師敢て第一番とは申されませんが、今日特に諸君にお話しなければ爲らぬのは、修辭學——手習ひするのでは有ませんよ、辭を修むと書くのである、西洋の言葉でレトリックと云ふが……日本に於ける漢文漢詩のレトリックに於ては誰が開祖であるかと云へば、又弘法大師であると云はなければならぬ。夫は何で言ふかと申せば、之です(本を示して) 御承知のない人は、或は御經文だと思はれるでせうが、斯りやお經文ではない、大師の著はされた『文鏡秘府論』と云ふのです。之れは六卷に分れて居るのを、合本にして三冊にしてあり升。で此の『文鏡秘府論』と云ふ六卷の書物を見ました結果、私は日本に於て漢文漢詩には弘法大師がレトリックの元祖であるといふ事を斷言するのでございます、此れは私の研究の結果として印を捺してお話することが出来ます。所で此の『文鏡秘府論』は何を書いてあるかと申しますと、詩と文の作り方を書いてある、先づ初めには平上去入、即ち四聲と云ふものゝ事を大層叮嚀に書かれてある、其の次には調聲用聲の事より押韻の種類あり、其の次には詩の體勢、六義

と云ふ様な事を書かれてある。夫から對句の事を喧しく書れてある、次にナヨ
ッと變つて今度は文體や文意と云ふ様な事を書れてある、而して最後に大に力
を盡されたのは此の第三冊目即ち五卷目に在る論病と云ふのである。すると貴
方がたの中には、或はそりやア可笑しい、病を論すと云へば例の内外科書の様
に病氣の事でも書いたのかと言はれるだらうが、さうじやないので、詩や文に
も亦色々病がある事を論じたのである。吾々人間の中にも肺病だの胃病だのと
種々の病がある様に、吾々が作る文章や詩にも肺病的、胃病的のものが多し。其
處で胃病や肺病やは、醫科大學なり府立病院なりへ這入れば治るだらうが、詩
文の胃病や肺病は何うしたら治るのだらうか。人間の身體の病は四百四病ある
とした所で……(哄笑拍手) 詩の方の病は何程あるかと云ふと、之れが二十八病
あるのじや、(笑) 文の方は幾らあるかと云ふと十病ある、其事が此の第五卷と
六卷に詩の二十八病、文の十病と云つて一々例を擧げて書いてある。之が大師
の有名なる『文鏡秘府論』であります。尤も此の書物の中にある事は必ずしも大師
一人の創作ではない、此の事は後にモウ一遍詳しくお話致しますが、此の中に

は澤山支那人の名前がある。即ち沈氏と云ふ人がある、劉氏と云ふ人がある、
或は王氏と云ふ人がある、或は元氏、或は崔氏と云ふのがある、其の外謝靈運な
どの名もある、孰れも支那の六朝時代より唐の初に掛けての學者の名前が澤山
出てあります。で自分は大方之れは何か種本があるのであらうと思つて……此
の話は後にしますが……お大師さんの著述の種本をメクリ出して來たら、大に
興味があるだらうと思つて、一二箇月もかゝつて色々ヒネクリ廻して見ました。
所が何うも種本はまア今では解らぬ……斯りや後にお話しますが、……私は敢
て廣言を吐くのではないが、支那の學者を備ふて來ても、明治四十年の今日ま
では……明日以後は知りませんが、誰れが遣つても解らぬ、貴方がたの方で探
されても容易に解らぬ事は保證する。(笑) 併し私は何うも種本があるらしいと
思つて、どうかして何處かで其の種本を發見しやうと思つて、此の間から頻り
と研究して居ました。尤も詩文の弊を論ずると云ふ事は、其の頃學者の一般に
喧しく言つて居つた事で、先に申しました『本朝文粹』と云ふ書物の中にも、詩の
病の事に就て難しい議論のある事は、同書を讀まれた人々は御承知の事と存じ

ます。それは何う云ふ事かと云ふと、大學生の大江時棟と云ふ人が試験に應じて詩を作つて出した所が、大内記の紀齊名と云ふ人が、斯りや詩の病があると云つて落第させて了ふた、所が之に對して大江匡衡と云ふ人が件の詩病は別に答めるに足らぬと云つて一篇の長い論文を作つた、其の文が『本朝文粹』に出て居るが（七）。凡て試験と云ふものは今でも大學生なり乃至高等學校、中學校其の他の學校でも、六月七月時分は試験だと云ふて大變苦しむやうだが、矢張昔も同様であつたと見える。尤も今日の日本では試験に落第したからと云つて之れを輿論に訴ふるなど、云ふ騒動は起らぬけれども、佛蘭西では曾て音樂學校の入學試験に或る人が落第した、所が、其の人が教官を相手取つて、私は落第すべきものでないと主張して訴訟沙汰に及ぼうとした事があつたことを留學中に見聞しました。此の『本朝文粹』の話は多少似て居ます。尤も試験に落第したからと一々教官を相手取つて訴訟などせられて堪るもんでないから、斯んな事は別に輸入したくありません、（笑） 餘談はさて置き『本朝文粹』の中には詩の病が八つしかないと云ふ事で、八病と書いてある。所が大師のは二十八病であるから二十

多い、夫からモウ一つ日本人の拵らへた修辭書に、『作文大體』と云ふのがある、此の本は大師入定後二百年頃に大江氏と菅原氏との修辭學の規則を輯めたもので、矢張『群書類從』の中に收めて這入つてあるが、其の『作文大體』にも詩の病は八つと書いてある。百年後に出來た『作文大體』でも八病しを書いてないのに、大師のは現に二十八としてあるのは何處から持て來たのか、斯奴（ヌ）一番詮索せんならんと思つて私は殆ど出來る限り調べて見たんですが、何うも出て來ません。所で或人の注意で、一應又宋の時代に出來た『詩人玉屑』と云ふ本を参考した、それは魏慶之と云ふ人の書いたので、京都大學には貴重書目として秘藏してある中に『詩人玉屑』と云ふ朝鮮板の本がある、何か種本の手掛があるであらうと思つて見た。所が……斯りや後にお話しますが……矢張八病しかない。其の餘の二十と云ふものは何うしても解らんです。其處でまた日本に傳つて居らぬ本にあるのだらうと思つたから、斯りや私許りでは力が足らぬと思つて、其の道に明るい私の友と云ふべき人々にも相談したのですが、結局何か種本があるとして見ても、今日まではまだ解らぬ。他の本には大抵八病しか論じてないのに、二十

ます。それは何う云ふ事かと云ふと、大學生の大江時棟と云ふ人が試験に應じて詩を作つて出した所が、大内記の紀齊名と云ふ人が、斯りや詩の病があると云つて落第させて了ふた、所が之に對して大江匡衡と云ふ人が件の詩病は別に答めるに足らぬと云つて一篇の長い論文を作つた、其の文が『本朝文粹』に出て居るが^七。凡て試験と云ふものは今でも大學生なり乃至高等學校、中學校其の他の學校でも、六月七月時分は試験だと云ふて大變苦しむやうだが、矢張昔も同様であつたと見える。尤も今日の日本では試験に落第したからと云つて之れを輿論に訴ふるなど、云ふ騒動は起らぬけれども、佛蘭西では曾て音樂學校の入學試験に或る人が落第した、所が、其の人が教官を相手取つて、私は落第すべきものでないと主張して訴訟沙汰に及ぼうとした事があつたことを留學中に見聞しました。此の『本朝文粹』の話は多少似て居ます。尤も試験に落第したからとて一々教官を相手取つて訴訟などせられて堪るもんでないから、斯んな事は別に輸入したくありません、(笑) 餘談はさて置き『本朝文粹』の中には詩の病が八つしかないと云ふ事で、八病と書いてある。所が大師のは二十八病であるから二十

多い、夫からモウ一つ日本人の拵らへた修辭書に、『作文大體』と云ふのがある、此の本は大師入定後二百年頃に大江氏と菅原氏との修辭學の規則を輯めたもので、矢張『群書類從』の中に收めて這入つてあるが、其の『作文大體』にも詩の病は八つと書いてある。百年後に出來た『作文大體』でも八病しが書いてないのに、大師のは現に二十八としてあるのは何處から持て來たのか、斯奴^{スナ}一番詮索せんならんと思つて私は殆ど出來る限り調べて見たんですが、何うも出て來ません。所で或人の注意で、一應又宋の時代に出來た『詩人玉屑』と云ふ本を參考した、それは魏慶之と云ふ人の書いたので、京都大學には貴重書目として秘藏してある中に『詩人玉屑』と云ふ朝鮮板の本がある、何か種本の手掛があるのであらうと思つて見た。所が……斯りや後にお話しますが……矢張八病しかない。其の餘の二十と云ふものは何うしても解らんです。其處でまた日本に傳つて居らぬ本にあるのだらうと思つたから、斯りや私許りでは力が足らぬと思つて、其の道に明るい私の友と云ふべき人々にも相談したのですが、結局何か種本があるとして見ても、今日まではまだ解らぬ。他の本には大抵八病しか論じてないのに、二十

八病書いてある所を見ますと、此の『文鏡秘府論』は誠に立派な修辭書でございませうまいか。千百餘年の昔に於て斯う云ふ立派な書物が出来たのを以て見ると、任他之れを以て大師の創作とせずとも實に世界に誇示すべき稀有なる修辭學とすべきではございませうまいか。して見ますれば弘法大師は日本修辭學上に於ける元祖で居らせられると云ふ事を、私は第二に明言するのでございませう。而して『古事類苑』が文學部に一ヶ所も此の書を引いてないのは太だをかしいです。因に夫の『番匠圖繪』も亦大師の作じやと云ふが或は一種の字書の嚆矢と見られやうか、それは附言に止めます。

第三章 美術上に於ける弘法大師

已に文學のお話をすれば、第三には美術のお話を致さなければ爲らぬと思ふ。で、大分話が面倒に爲りますが、美術としては根本の美術は五つに分けて見ます。即ち建築、彫刻、繪畫、音樂、詩文、斯う云ふ様に五つに分けて見るのであるですが、又小さく之を見ると、彫物と畫……即ち繪畫と彫刻との二つが之が美術と看られるのであるです。其處で大師の美術史上の位置を説くに方つても亦建築や音樂の事に涉つて説くことは時間が許さないから、今は只繪畫と彫刻とに對して聊かお話しして擱めて置かうと思ひます。偕、諸君、日本の神代には畫はあつたらうか無かつたらうか、申すまでもなく神代の人とても實際多少畫は書いたらうが、書いたとしても畫としては至極幼稚なものであつたに違ひない。で今の様な所謂繪畫が日本で出来たのは、雄略天皇の頃に百濟の因斯羅我と云ふ……變な名前だが……人が始めて來朝してからだと云ふ事は古い書物に出て居ます。併し其の頃は未だ充分發達しなかつた。で殊に佛畫が盛

に流行致し始めましたのは、推古天皇の頃からである。之れは小學校の歴史にも書いてあると思ふが、併し其頃の畫は猶ほ随分幼稚なものであつて、實に質朴なものです。漢魏の古法など云ふが、法隆寺の玉蟲厨子の繪や天壽國曼陀羅などは洵に立派なものであるけれ共、極く質朴であるとは争はれない。夫からッロ／＼と進んで、何時頃書かれたか確と解らぬが、法隆寺金堂の壁畫と爲つては、今も國寶として尊重されて居ます。で日本美術も能く調べて見ますと云ふと、やはり外國から傳承せられたもので、それには二つの脈がある様に思はれるのであります。即ち奈良朝以前の畫と云ふものは支那の北の方から來た繪であつて、平安朝から後の畫と云ふものは、同じく支那から來たのであるが、少し南の方から來たのであらうと思ひ升。斯う云ふ事を云ふと、今日は確井君なども聞いてござるから、或はお釋迦に説法の様な事で耻入る次第ですが……一體佛畫と云ふものは、何はともあれ印度から起つた事は疑ひない、佛さんは印度から起つたから佛畫も矢張印度から起つたのでせう。夫が吐蕃と云つて即ち今日の前後兩藏に這入り、それから支那の北の方なる蒙古の南部を経て三韓に

這入り、終に日本に來たのが所謂漢魏の古法で即ち支那六朝時代の繪風なのでありはすまいか。夫れが奈良に來てからやがて奈良風の繪が出來たのであつて、後に春日派が其の衣鉢を傳へたのだと思ひ升。法隆寺の壁畫が夫に屬すると云ふには大議論もありませうが、或る人は印度のアゲンターの壁畫と法隆寺のとは同じ畫風であると云つて居ます。是れが所謂北から來た畫である。所でモウ一つ南の方の畫は、それも矢張印度に源を發して、同じく吐蕃を経たのには違ひないが、蜀の方へ這入つて支那の内地へ參り、充分支那風土の感化を受けて終に日本に來たので、此の南の方の畫を持って來たのは誰であるかと云へば、即ち弘法大師並に傳教大師などであるです。而して此の南の方の畫は平安朝に榮えて、後に巨勢金岡の一流が出來たのです。巨勢金岡は日本畫を始めた豪い人であるですが、金岡が豪い人であると共に、吾々は又弘法大師乃至傳教大師の恩澤を認めなければ爲りませぬ。而して其の北の畫と南の畫とは何う違ふかと云ふと、北の畫は一言で言ふと莊重の態度を執つて居り、南の方は雄渾の態度を執つて居る。夫で佛畫としても極く柔和忍辱の相好を供へた上品なものは北の方にあ

るが、森嚴なるが威力を表はして居るのは南の方から出て來たものと思はれる。
二〇 して見れば、大師の我が國の繪畫史の上に於ける位置と云ふものは、略ぼ
明かにする事が出来るのではございませうか。尤も大師直筆の畫は有る様で
其の實は餘り多く無いのじやさうです。失禮な話でありますが、高野山明王院
の赤不動や又は東寺、醍醐の五大尊とか云ふ様なものも、傳説は弘法大師のお
筆に爲つて居り、又國寶に爲つて居る事でもありますけれども、其の赤不動とか、
五大尊とかも或は稍々後世の作であらうとか何とか、『國華』記者などは兎や角書
いて居るです。併し私は其の説の是非は一向解らぬ、尙『日本畫史』と云ふ本が
あつて、夫を開けて見ると釋門の部に弘法大師の書かれた畫が大凡三十種位も
載つて居るが、其の中には實は大師でないのも澤山あるやうです。現に先
頃來京都博物館の時代陳列に並んで居りました東寺の眞言七祖の畫像は、同書
には皆悉く大師のお筆の様に書いてあるが、夫はさうで無いので、龍猛、龍智の
お二方を除けた外の筆は、李眞と云ふ畫家が書いたのであると云ふ事は、只今
にては疑の無い事になつてあります。尤もお寺の傳へでは李眞の眞の字が紳と

云ふ字に爲つて居るようですが、大方夫れは音の間違ひで、眞と云ふ字の方が
正しいのであると其の道の人は言ふが三三 右の七祖の中で、龍猛、龍智の二つ
丈は全く弘法大師のお筆であると、先づ今日迄は爲つて居るです、けれども、
之れさへも近頃の『國華』記者は遠慮なく何うも之れも矢張支那人の筆であらうと
書いてあるのです。三三 さうして見ると何分餘程古い事だから、大師の畫に就
ては眞偽は解り悪くいが、併し誰が何と言つても、大師の畫風が雄渾豪宕にし
て大威力を供へて居る事には皆々一致する事ですから、繪畫に於ても大師の功
績は充分認めなければ爲らぬと思ひ、升。

次に彫刻の事ですが、斯れは奈良時代が盛んであつたので、今日も東大寺の
三月堂などに行つて見ると、天平時代の立派な彫刻が澤山あるですが、それから
轉じて此處東寺に參詣して、さて誰が何と云つても之は異論のない大師直作の
不動明王の尊像を拜して御覽じなされませ、奈良に於て見るものは誠に靜かに
出來て居る、所が東寺の不動明王さんは……固より不動明王さんと云ふ性質か
ら來るのかも知れませぬが、非常に活動して居られる。奈良の方は、コッ、細

かに刻まれてあるが、此方のは、一刀で勢強く刻れてある餘計お手数をかけずして遣つてあつて、勢が現はれて居る。夫れは東寺の不動さんに就いて明に見る事が出来る。即ち斯う云ふ風が後の大佛師運慶などに知らず、いゝの間に感化を及ぼした事が分かるのですが、大師は實に畫に於てのみならず彫刻に於ても亦古今稀なる方であつたと云ふ事に爲る。併し夫れだけの話では一向耳新しき事は無いが、モウ少し補つて申すと、大師は儀軌と云ふものを拵えられた、儀軌と云ふのは何んなものかと云ふと、即ち佛像の莊嚴及び持物の事に關する型式を言ふのであつて、大日如來は何う云ふ風にするとか、阿彌陀如來は何う云ふ風にするとか、略して言ふて見ると、諸佛諸尊に就いて各々莊嚴持物を一定するのがそれが儀軌です。で、弘法大師以前は、何の佛も儀軌が定つて居らぬから、一寸拜見しても此の菩薩は誰であるか、此の佛は誰であるか、作者に依つて多少違ふて居たから、ドレを拵えたのか確と解らなかつたのが、儀軌と云ふ者がナヤンと極つて、どの佛は何う云ふ形、ドの明王は何の形に爲つて居ると、ナヤンと彫刻繪畫の上に一定の型式が備はつて來ました、是れは特に大師の功績であ

る。而かもそれは決して密教のみでなくて、顯密二教共其の恩徳を蒙つたと云ふ事でありませす。之れも非難すれば非難することが出来る、乃ち斯く一定の形式が出来ては自由の餘地がないと云ふ者がある。併し實際は決してさうじや無い。自由と云ふ事と無法と云ふ事は別です。儀軌の中で以て活動するには、綽々として餘裕が存じます。道德上如何に自由々々と謂つても矢張五倫五常は守らなければ爲らぬ、夫れを俺ら守らぬと云ふのは、斯りや無法であらう。即ち儀軌があつても少しも自由を束縛する所はないから、決して大師を怨む所はなからうかと思ひ升。

夫れからモウ一つ繪に就てお話する事がある。それは、今までの佛畫に就いて言つたのだが、其の外に又日本固有の大和繪と云ふものがある。それは何時頃から行はれたかハッキリ解りませぬが、大師没後大凡百五十年位を経ました一條天皇の頃より行はれたものであらうと申します。此の大和繪の起りも亦、大師の力に依ると云ふ事が多いのです。夫は何う云ふ譯かと云ふと、弘法大師は朝廷から高野山をお貰ひに爲つた……之れは後にお話するですが……高野山をお貰

ひに爲つて、お寺の中に或る庵室を構へられた、所が誠に風景は好し面白い所があるから、感興の餘り高野の山水の概略おぼろを書れたのが夫の所謂山水屏風で、それを嵯峨天皇様でございましたか、時の帝の御覽に入れられました。其の屏風の現物か或は下書か知らぬが、長く高野に残つて居つた。所が後世後醍醐天皇が芳野に在らせられた時に……尤も其の時は世の中が大變騒がしかつたから行宮に隠れられて外へは出られませんが、斯れはチャンと歴史に書いてある。併し天子様じやからとて、畏れながら牢屋の中に押込められた様に窮屈では堪へらるゝものでない、で、之りや表だつては行幸も出来難うからうが、吉野の皇居から遠足がてらに潜に高野山に行かれた事がある……其の時此の屏風を御覽に爲つて、寂感斜めならずであつたと云ふ事が、書物の上に見へて居ります(二四)。して見れば大和繪のも、開祖だとは言へるか言へぬか知らぬが、兎に角准開祖である位は、弘法大師に對して今日言へるだらうと思ひ升(拍手)

まだ色々申したいともあるですが、兎も角繪畫の話と彫刻の話は之れで擱くと云ふのは今又他の一方から見ると云ふと、凡そ繪畫と云ひ彫刻と云ふものは

……エライ失禮な話じやけれども……事に依つたら弘法大師が御自身で筆を執つて書かれたり、或は刀を執て刻まれたんではないかも知れぬ。それは私共が曾て美術史を習つた時に、昔のミケルアンゼロと云ふ人物は、大變畫が上手で且世界一の彫刻家であると聞いたが、さればと云つて彫刻をすると云つても、先生自身で以て大理石をコツコツ鑿るのではない。先生は雛型だけをして置いて、其の後は職人がコツコツ行つたのであり、畫でも大體デザイン(圖取)をして置けば、細かな所は他の畫師共が夫に依て書いたのであるらしい。現に京都大學にも田邊さんと云ふ工學博士が居られるが、此博士は夫の琵琶湖から疎水を造られた方である事は諸君も定めてお聞及びであらう。併し田邊君が當時鋤鍬を擔いでコツコツ掘られたかと云ふに、田邊君が掘つたものでないことは明かである。(哄笑、拍手)又今日の此演説も速記して書物にする積りですが、谷本が拵えたのであると云つても何も私が活字を拾ひは致しません、私は此處で演説するのを、速記者が書いて、而して活版を遣る者が捨つて印刷して夫れで出来るのです。夫れでもやはり谷本が拵えたのだと言はれる。速記者の前で言と悪いが、

速記者の仕事は手先丈で仕て居る仕事であり、演説家のは頭の仕事である(哄笑) 夫れから割出して見ると、彫刻なり書なりも或は大師御自身でせられたもので、はあ、面白いかと思ふ。書にしても、彫刻にしても大師は其の根本だけを考へて、其の後は書師なり彫刻師なりに遣らされて居たらうと云ふ事を相像する事が出来ず、従つて同じ大師の作にも色々の相違があるのは無理ならぬ事と存じ升。

第四章 書道に於ける弘法大師

併し此度は他人に遣つて貰ふ事の出来ない者がある、否出来ない事もありませんが、他人にはやらせないで屹度大師自身で遣られたものがある、それは書で、實は彫刻よりも繪畫よりも書の方が重であるから、其の書の事に就て私の研究した所……之れは多少新研究であるですが……それをお話して見やうと思ひます。

儲右様に申しましたが世間には文字も他人に書いて貰ふのが随分ある相な、(笑)夫の伊藤公爵など云ふ人は詩も上手であり書も上手であつて公爵伊藤博文とか春畝山人とか署名した者は素より皆自筆であるが、併し他の大臣連中には往々お出入の書家や詩人があつて、内々夫が代作代書するものもあるさうな。私の様な悪筆でも、上手な書家に代筆をして貰つて置けば、後々には谷本は書家じやと譽められるだらうと思ふのじや。(哄笑)拍手)併しながら大師は決して代筆などはお頼みに爲らなかつた。弘法大師は、繪畫や彫刻の元祖であるとは云

へないが、書道の元祖……入木道（じふくどう）の元祖であるとは世人の夙に言ふ所であつて、畏くも嵯峨天皇と相並べて書に於て二聖と仰がれるのである事は、學校の教科書にも書いてあらうと思ふ。弘法大師は子供の時分から餘程書道に骨を折られたと云ふ事は、斯りや歴々證據がある。夫れから支那に行かれてより一層勉強せられたのでありますが、弘法大師の書に於ける功績に就きましては、私の知る所では、其の道の黒人たる黑板文學博士が、「書道に於ける弘法大師なる一論文を、過日東京の或る雜誌に載せられたのを此方の『六大新報』にも同じく掲載されて居りましたから、諸君も讀まれた事と信じますが（廿五）。黑板君は専ら古文書を取調べる人で、又考證學には明るい人でありますから、私の如き門外漢は素より及ぶ所でなく、詳しく事は其の論文の方に譲つて好いのであるが、併し私にも亦多少異見がないでもないから試に述べて見ませう。

大師は右申す如く幼少の折より書道には非常に勉強せられ、尙又支那に行かれてからは良い先生を取つて習はれたのであり升。師匠は何と云ふ人かと云ふと、韓方明と云ふ人で、此の韓方明と云ふ人は、餘程筆法に明るかつた人と見えて、

其の著述に『授筆要説』と云ふものが残つて居るのでございます……尤も斯りや名前丈が残つて居るのでございますが……即ち大師は韓方明に習はれた傍ら、尙は廣く碑文、法帖の類を取り蒐められて、夫を持歸つて嵯峨天皇に献上せられました。『性靈集』の中に「奉獻雜書迹表」と云つて、色々の人の書かれたものを献上し奉ると云ふ文が載つて居る（三〇）。其の種類は黑板君も並べて居られるが、此處が私の見る所と少々違ふ。黑板君のお説で見ると、大師は支那に行かれて廣く碑文や法帖を取り蒐めて研究された、而して遂に一家の風を立てられたと言はるゝ様じやが、チツと私のと違ふ。尤も私は黒人でないで好く解らぬから、諸君の中の黒人の人に判断してお貰ひしたいのです。其の頃即ち奈良朝時代に於ては日本人は何を習つて居つたかと云ふと、先づ王羲之を習つて居たらしい。王羲之は有名（有名）の書家です、で、『萬葉集』の中には、羲之と書いて假名にして、ヒシと讀ませる程です。大師と云へば弘法大師の如く、手師と云へば王羲之であつた。其處で弘法大師も支那に行かれるまでは、王羲之をば能く習はれて、殆んど羲之と紛（まが）ふ程に書かれた。其の證據は言傳へに依ると、大師が入唐の時

は唐の憲宗、皇帝の時代で、即ち徳宗皇帝が死なれて憲宗皇帝が立れたが、其の皇帝の宮殿中に、王羲之が一面に書いた壁紙があつた。所がそれが一間だけ何うした拍子か破損して居た。其處で誰か王羲之の様な字を書くものがあらば雇つて書かせたいと思つて御座つたが、其の當時支那には可然人がなかつた。所が幸ひ日本人に空海と云ふのがあつて、羲之流の文字が上手に書ける様だからと云ふことで、弘法大師に御依託に爲つた。其處で弘法大師は勅命のまゝに筆を加へて修復した所が、出来上つたものは羲之と瓜を合せた如くであつたので、皇帝寂感斜ならずであつたと云ふことが書いてある^{三七}。然るに其後大師が留學して歸られてから嵯峨天皇に表を上つた中には……之れは「性靈集」にあるのです。右軍累巧猶未得其妙と云ふ文句がある。右軍は王羲之の事で、即ち王右軍は餘程書道には骨を折つて居るけれども、まだ、極妙の所へは行つて居らぬと云ふことである。是れは屹度大師が支那に行かれてから書道に對する思想が多少變更したものがあつたに違ひないと思ひ升^{三八}。夫れを考へて見ると云ふと斯う云ふことに成るのであるまいか。凡そ日本でも支那でも其の頃書には、二つ

の流派があつたです。即ち北派と南派である。北の方は碑文であるから之を北派と云ひ、南の方は法帖であるから之を南派と謂つた。此の二つの派が既に六朝の間に分れて出来た。北派と云ふ方には何う云ふ人があるかと云ふと索靖崔悅歐陽詢褚遂良と云ふ様な人で、南派と云ふ方の人は何う云ふ人かと云ふと、王羲之王献之虞世南と云ふ様な人があつた。即ち此の南帖派と北碑派との二つあつたが六朝の時代には、北碑の派許りが繁昌して、南帖派は顯はれなかつた。それが唐に入りて南帖派は顯はれたので、奈良朝の時代に爲つて日本に渡つて來たのは、全く唐の書風の南帖派であつた。畢竟唐の太宗皇帝が非常に王羲之を好まれた餘風と謂つてもよからう。斯く奈良朝時代以來羲之が流行つて居て、大師亦それを習はれたのです。所が支那へ行かれてから澤山北碑を見られた。夫の顔真卿と云ふ人などは南の方で居て實は北の文字も書く人でありませう。顔真卿は碑版に長ずとありますのはそれです。其處で大師は主として顔真卿を習はれたらしい。南帖だつて北碑だつて、勿論同じ文字ではありませうが、北碑は非常に強いのです。して見ると弘法大師は在來の南帖の外に北碑と云ふ一流を

持て來られたと云ふ事が解る……これは私が今日此處で始めて喝破致すのであります。私の前に明言した人がありましたならば、夫は何うか承りたい。黑板君も碑板の事は言つてある様だが何うか夫れをもう少しハッキリ言つて貰ひたかつたので、大師は南帖派の外に北碑派を持て來たと云ふ事を言ふのが私の眼目です、夫れは何う云ふ據り所があるかと云ふと、種本を示さなければなりません、私の僚友で文學士の狩野直喜君と云ふ支那學の先生が持つて居る本に、今の清朝に有名な阮元と云ふ考證學者があるのですが、其の人の著述に『學經室集』と云ふのがある。此の本は日本に外には一部もないでせう。で此の阮元と云ふ學者の書いた『學經室集』を開けて見ると、『南北書派論』『北碑南帖論』と云ふのがあつて、之れは實に古今第一の書史の論である。之れまで研究して見たもの、中は、之れ以上の議論はなからうと思つたので、私は懇望して此の本を借りて讀んだ、それから此の結論は出て來たので、私の新研究として、大師は在來の南帖派の外に、北碑派と云ふものを書道の上に唱へられたと云ふ事を、此處でハッキリ申すのでございます。

夫から尙此外に筆と云ふものも大師が改良せられたのです。黑板君は大和の東大寺の正倉院のお庫の中に、色々筆が這入つて居るが、羊毛の筆と兔毛の筆と二つ丈で、狸の毛の筆がないから、狸毛の筆は多分弘法大師より始まつたものであらうと言はれてあるが、之れは全く確的の事實で、即ち『性靈集』の中に、狸毛筆四卷を献するの表がある。之を以て見ると、大師は支那から狸の毛の筆の拵方を習つて戻られたのである。夫れは南帖派の文字を書くには羊毛なり兔毛の軟い筆が好いが、北碑流の文字は何うしても狸毛の剛いのでなければ書けなかつたのに違ひない。又夫れまでの筆は所謂雀頭筆で尖は短かつたのを、大師の時から尖が長う爲つたさうです。其處で大師は更に進んで執筆法、使筆法を定められました、長くなるから略します。兎に角書道に於ては大師は格別に巧績がある事が解りませう。

之れから後は極く簡短に遣りますが、この次は宗教じや。始めは言語、其の次は文學、美術并に書と順々に行つて、次は宗教と爲るのです。

第五章 宗教上に於ける弘法大師

偕此の宗教と云ふものに至つては、斯りや又實に萬物の靈長たる人間に限るので、牛や馬に宗教があると云ふ事は未だ聞いた事がない。(笑) 野蠻人には早く已に多少の宗教があります。兎に角宗教と云ふものは人間に限つたものであるとすれば文明史上最大切の事です。尤も宗教上に於ける大師の功績を述べるとなれば、それは澤山申す事が出来ませんが、今日は其の時間がないから唯簡單にお話して置きます。そこで先づ日本に佛法の這入りましたのは、何時であるかといふと、ハッキリ解らないけれども繼體天皇の時に司馬達等と云ふ者が持つて來たのが始めであると云ふことです。其の後欽明天皇の時より追々盛になつて聖徳太子や蘇我馬子が出て愈々繁昌しました。併し其の頃の佛法と謂ふのは俱舍であるとか、或は三論であるとか、成實乃至律、法相の類で小乗或は權大乘に屬したもののみです。奈良朝の時代に成つては、華嚴宗が行はれて來た、是れは勿論純粹の大乘でありますが、併し當時のものは實は見方に依ては何ら

にも見られないでもありませぬ、……精しく申すとは出来ませぬが……兎に角三論にし見ても、成實、法相にして見るも、小乗にあらざるば權大乘と云ふのであるです。其處へ顯教の極致とも謂ふべき法華一乘の妙宗が開かれたのは平安朝であつて、其の前にも經文は或は來て居たらうが、之れを開發を揚して以て顯教を完備したのは、天台宗の開祖傳教大師の力であり升。而して此の顯教と相並んで……尤も或る意味では顯教、密教と云ふものを傳へられたのは、其の前にも無論ありましたらうけれども……日本で密教を開かれたのは、全く弘法大師の力でありませぬ。茲に至つて今までの宗旨以外に密教が出来ました。所で大師以前にも夫の有名なる行基菩薩などいふ名僧も有つたが奈良朝時代には、又悪い坊主……坊主と云ふと或は失禮だか知らんが……惡僧の玄昉とか道鏡などいふ手合がありました。玄昉だの道鏡だのと來ては、相場付の極悪いものと爲つて居ります。(笑) 併し之れも私は或は見方に由つては一議論出来るかと思はぬのではない。現に普通の歴史の上では明智光秀と云ふとドエライ悪い者に爲つて居るので、先日も高野山へ登つて見ると、明智光秀の墓といふのが立つて居る

が、此の墓石は新しく立てかへても直ぐと割れて了ふさうです。何、堅い石で拵らへれば割れる筈はないと思ひますが、山の者は必ず割れるのだと云つて居ます。兎に角、主殺であるから、極悪に違ひはないが、而も私は又明智光秀が敵は本能寺に在りと二條城を睨んで遣つて來た當時の意氣を愛宕の山頭に登つて回想すると一種の感がありました。何うか光秀の冤名を雪ぎたいと念じて居升。又石田三成なども徳川氏の時代に書かれた歴史には無論大變悪いものに爲つて居ますが、徳川氏の勢力が及んで居らない國例へば薩摩などでは、三成も決して夫れ程悪人に爲つて居らぬといふ事です。斯く申すと新聞記者諸君は、谷本が奸惡の石田三成に賛成した、好い種が出来たと思はれるか知らんが、(笑) 實の所私は夙に石田三成に同情があるのです、今は暇がないから止しますが、何か好機會があつたらば精しくお話をしやうと思ふのです。さう云ふ様に歴史の表面には悪い様に書いてあるにしても、道鏡でも玄昉でも取調べ様に依つたらば、色々新しい事實が出るかも知れませぬ。兎に角今迄は玄昉又は道鏡と云へば、悪僧と相場が極まつて居る。そこで奈良朝廷では佛教僧徒にテヨすつて居

られたので、終に都を山城に遷されたのださうです。平安遷都には色々理由もあらうが、其の内實は玄昉一流の僧侶が餘り蔓つたから、桓武天皇様が終に逃げ出された譯であるさうな。若果して夫れが事實ならば、京都人は間接に玄昉や道鏡の功を認めればならぬ譯ではありませんまいか。詰る所奈良では僧侶が跋扈して居つたので、桓武天皇が僧侶の專横を矯めて政治の面目を一新せられやうと云ふお考で以て、都を遷されたのですが、幸に平安朝に於ける佛教の權者たる、弘法、傳教の兩大師は、孰れも謙讓の徳を備へて、亂暴などは微塵もななく一方は叡山、一方は高野に據つて、南北相對して皇室を翼賛し國家の爲に力を盡くされた事は大に特筆せなければならぬ。將た又兩部神道と云ふものに就いては、是は行基菩薩が已に第一着手を試みられたと云ふ説もあるが、それも略ぼ大成せられたのは弘法大師の力であり升。尤も此の事は暫く通説に従ふので、實は大師の著述の中には兩部神道を説いた者はない、夫の『麗氣記』なども亦全く後世の假作である。併し多少は大師に胚胎するともあるのであらうかとも想はれる。此の事は文學士の辻善之助といふ人の論文が『本地垂迹説の起源に就

いてと云ふ題で本年一月以來『史學雜誌』に連載せられ掛て居る様だから一覽を望みます。何はともあれ水戸流の學者などに言はすと、兩部神道などは怪しからぬ事じやと、大變異論があつて、頻に弘法大師を悪く言ふ様で、現に栗田氏の『神慮志料』と云ふ様なものを開いて見ると、大師の事は悪う書いてあります。併し私は公平に言ふが、此の兩部神道は純粹の神道としては或は具合が悪かつたか知らんが、宗教としては確に一步を進めたものであるのです。私は此兩部神道を普遍的宗教に近づく楷梯と見るので、先日も釋尊降誕會に於て演説した如く普遍宗教を希望する餘り^{三三} 今日は大師が兩部神道の開祖とすれば、また之れに由りて普遍的宗教の上に一步を進められた大功績がある事を申したいのであり升。宗教の事は門外漢ですから之れで擱きます。其の次は哲學である。

第六章 哲學上に於ける弘法大師

大師の哲學に於ける位置は、ドエライものである、是れは宗教とは違ひ幾分か本職に近いものですから、十分に述べたいのですが、今は其の時間がないから唯斯う云ふことを言つて擱きませう。凡そ哲學を遣るには頭がないと出来ません。哲學と云ふものは萬學を統一したものであつて、頭腦が包括的のものでなければ爲らぬが、我が大師は實に包括的智識を有して居らるゝ大哲學者であると申すです。古今を見渡した所で、日本で弘法大師位哲學に適當した頭腦を持つて居る人は……明治以前と云ひませう……明治以前に於ては恐らく他に一人もなかつたらうとおもひ升。何故夫れが解るかと云ふと、夫はじや、一番手に……世間有觸れた本ですが諸君も御承知の……『三教指歸』と云ふ本を見ると分かります。之れは弘法大師のお若いときの……二十歳前後の著述で、始めは『叢書指歸』と云つた、其の草稿と云ふのを先日も高野山で拜見したことであります。で此の『三教指歸』は何を書いたものかと云ふと、其の頃日本にあつた佛教と儒教

と道教(老子の教)との三つを比較したもので、夫れが又甚だ面白く出来て居ます。龜毛先生、亡隱處士、假名居士と云ふ三人に假托して書かれたもので、龜毛先生と云ふのは儒教で、亡隱處士は道教で、假名居士と云ふのは佛教です。此の三教を比較されて言つたのじやが、大師は此の書に於て倫理道德は固より必要であるけれども、往々形式に涉るからして、倫理道德のみでは満足することが出来ない、倫理道德を説くには必ず哲學的の根本なるもの、即ち今の言葉で言へば、世界觀、人世觀の上より割出したる根本的眞理がなければ、ア、ヤ、フ、ヤ、である。即ち儒教も結構じや、道教も結構じやが、佛教に依て……哲學的世界觀、人世觀に依て、此現象界を去つて宇宙の眞相を知らなければ、到底人世の根本義と爲す事は出来ぬと云ふ意見を書かれたのであります。此の本は其處等の古本屋に二十錢内外で賣つて居るから一冊買つて御覽なさりませ。若し解らなんだら段々大徳さんが御座るから聞けば宜い。一度は讀んで御覽、中々面白い本です。夫から其の次には又御承知の通り日本で出来た立派な哲學書の隨一で、即ち大師が歸朝後勅命に依つて作られたる『十住心論』と云ふものがある。是れこそ

實に大師が絶大なる哲學的智識を發揮せられたるものです。失禮な話でござい
ますが此『十住心論』は今で申さば文學博士の學位論文の様なものでせう。先刻も
佐伯君が、大師が今生れて居られたら文學博士、醫學博士、法學博士、理學博士、工學
博士、農學博士、乃至獸醫學博士とドの途の學位も兼有して居られるであらうと言
はれましたが、實に其通りです。で御承知の通り博士に爲るには推薦と云ふ事
もあるが、本筋は論文を提出すると云ふ事に爲つて居ます、此の頃は兎角博士
の評判が悪い様じやが、出す方の人では皆一生懸命で出すので、誰の論文も皆
立派なものです……私の如きは論外ですが……大師の『十住心論』は失禮ながら博
士論文と看ませうか。私は『文鏡秘府論』にせよ又『十住心論』にせよ、孰れも實は陀
度何か種本があるだらうと思つて……エライ失禮じやけれども……色々取調べ
て見ました。所が、『十住心論』の中にある文字は往々『菩提心論』や『大日經』や『金剛頂
經』などに見へて居るから、大方此處等から拔書きされたんだらうと思つて仔細
に讀んで見たですが、成程似た文字はある様だけれども、決してピッタリ合ふ
ものでない。『華嚴經』にも五教十宗等の判釋もあり、智者大師にも五時八教の判

釋があり、其文字の用法などは多少似て居る所があるとしても、其の内容は全く別です。是れを以て見ますと、『十住心論』は全く大師の創作と云つて宜いものであつて、實は智者大師の五時八教以上に一頭地を抽きて顯密兩教を網羅して居ます。大師が在來の諸宗教を『十住心論』で縦横無盡に包括して判釋せられたと云ふ事は、如何に廣大な頭腦でありましたらうか、如何に包括的な腦髓でございませうか、私は之れを以て大師は日本哲學者として第一のお人と思ひますから、『學者の觀たる弘法大師』の中にも、『夫の十住心論の如き一部の哲學組織として是を觀るも亦眞價乏しからず云々』と、及ばずながら贊嘆の言葉を盡したでございます。此の『十住心論』に就てはお話して行けば色々あるけれども、餘は他日に譲つて置いて此の邊で擱めて置きます。初學には『顯密二教論』を勧めます。尙又『即身成佛義』に於る六、大緣起の事は、希臘古哲學流の趣があつて、大師の哲學を論ずる者は必ず一度は拜讀せねば成りませぬ。併し恐らく是れは哲學史上では非常に進んだ者とは申されませぬ、而して又大師創見の説とは申されませぬ様だから略しますが、小野藤太といふ人の『眞言哲學』などを参考なされませぬ。

第七章 教育上に於ける弘法大師

偕今迄は言語じやの、美術じやの、或は文字じやの、宗教じやのに就て論じましたが、私の本職即ち教育史上に於けるお大師さんをもお話せんければ爲らぬと思ひ升。見受ける所、小學校の教員方も幾人か御座る様だから、何か教育の事をお土産に申さんければ爲らぬと思ふですが、實は是は今日故らに申さなくても、先頃日蓮宗僧侶の發起にて、市會議事堂で、宗教と教育との關係と云ふ演説をした時に、十分大師の御遺徳をお話して置いた筈ですから、今日は敢て反復せんでも宜いと存じます。依つて極く短簡に申述べて置きますが、抑々弘法大師が教育に於ける功績は太だ多い中にも、此の東寺の御近所、即ち九條の邊に綜藝種智院と云ふものを立てられて、普通教育を肇められた事は、確に其の一でございませう。當時京都には官立の大學を始め其他にも淳和、獎學、勸學、學館と云ふ様な私立の學校が色々ありましたが、孰れも公卿勢家の手に成りたるもので、學生は一門の子弟に限り、廣く一般の庶民に學藝を修めさせ

事は出来なかつたのです。所が大師は其の缺點を補はんが爲に綜藝種智院と云ふものを立てられました。僧侶庶民一般の者を入學させて、佛學は勿論外典までも教へる様にして、支那風の闊塾の制に倣つて、各階級を通じて普通學を教へる學校を始めて立てられました。即ち今日茲處で私が演説をする此の東寺の附近に普通教育の基礎が置かれたのでございます。幸ひにも大師の親筆と稱する綜藝種智院の規則が尙残つて居りますから、今日持つて來たです。之は眞物と一分一寸違はぬものであるですが、綜藝種智院式と云ひまして、其の現物は御承知のとはり羽前米澤の上杉神社の秘藏に爲つて居ます……原は高野にあつたのですさうなが、私は先年二回程米澤へ行つて上杉伯ともお近付に爲つたもんですから、同家の保管に爲つて居るのを拜見したのですが、通例上杉神社で懇望者に見せるのは實は寫しなんだ、現物は大事じやからと云ふので、米澤銀行の金庫の中に納つてあります。(哄笑)で、私は銀行へ行きましたが、重役の人が金庫を開いて恭しく見せて呉れましたが、それは寫しと全く同じです。で私は寫しの方を二つ貰つて來て、一は品川子爵——私の恩人なる故品川

子爵に贈り、モウ一つは私の手許に残つて居るのですが、併し又た悪口を言ふ人があつて、元來此の式は決して大師の書じやないんだと云ふ者もないではない。大師の書と云ふは澤山あるが繪畫同様怪しい物が多いさうで、先きにお話した此の東寺にある七祖の畫贊とか、或は高雄に在る「灌頂記」とか、仁和寺にありませう三十帖冊子とか、あ——云ふものは夫は皆立派なものだが、併し此の綜藝種智院式などは怪しいと云ふ人がある、或は眞に怪しいか知らぬが、此の終を見るに正しく天長十九年五月十九日空海書とあるから、兎に角怪しい怪しくないは別として、之れを一つ各小學校の講堂に掛けたい。此の法帖は元來卷物に成つて居ますが額面に直して掲げたならば、非常に宜いと思ふ。私は教育史にこれ位關係あるものは多くないのであると云ふ事を諸君に御吹聴するのです。

まア綜藝種智院の詳しい事などは擱いて、次に普通教育の上で最も著しい事柄は、「いろは歌」と大師との關係でございます。之れに就ても私に多少新説がある……長うなりますで疲れたら何うかお立ち下さい……通例言ふ所では、片假名の五十韻は吉備大臣が作つたものであつて、「いろは」四十七文字は弘法大師の

お作であると、斯う云ふのですが、人を誣へば穴二つで、先刻の吉備大臣は片假名を作つたのでは無いと云ふ論法で參ると、平假名も亦弘法大師が作つたのではないと云ふ事になります。即ち平假名と云ふものは、既に弘法大師より以前にあつたのです。既に以前にあつたとして見ると、弘法大師も亦矢張吉備大臣の片假名に於けると同じことで、今の様な假名に一定せられたかと云ふと、さうでもない。此の事は文學博士の小杉楯村と云ふ人が國華などに色々書かれてあるが、今のいろはの様な字風は、之れは破草體と云つて、其の頃書いた書體とは大に違ふ。其の頃の字體は恐らく昔から傳つた紀貫之などの書いたもの、風で、夫の『年山紀聞』に載つて居るものなどと能く似て居たのだらう。私は先日高野山の寶物展覽會を拜見しましたら、矢張今のやうな牛の角文字のいろはがありました。併し京へ戻つて調べて見ますと小杉氏の説では、あれは何うも偽物じやさうです。さて然らばいろは文字は弘法大師以前にあつたとしたならば、大師はいろはとは關係がないかと云ふと、そうではない。私は四十七文字の歌を拵えられたは、誰が何と云つても、之は大師のお作と見るのが穩

當であらうと斯う云ふです。吉備大臣は五十韻圖は拵えられなかつたが、弘法大師の方は平假名の前からあつたのに對して其のいろは歌を拵えられました。それには證據がある『江談』と云つて大江匡房の書いたものださうだが、其の『江談』の中に或る時大江匡房が小一條の邸即ち今の御苑内の賀陽宮さんの邸へお出でに爲つた時に、お話序に、一體假名のいろは手本は誰が拵えたのだと尋ねられた時に、あれは弘法大師より始まる、併しながら大師より前に假名の日本紀と云ふものもあれば、何うも此の儀少々不審なり、恐らく假名に合して此の文句を書いたのであらうと答へられたと云ふことが、『河海抄』に載つて居ます。尤もお大師さんがいろはの歌を拵えられたと云ふのは、外に證據があると云ふですが、年來調べて見た結果、私は茲に一新説を述べるのですが、夫れは先程申した『凌雲集』と云ふ本、即ち天長年間に出來たものの中に、仲雄王といふ人が大師の徳を賛した句があります、即ち字母弘三乗、眞言演四句と云ふので、之れを從來は往々學者が引いて字母とは即ちいろは四十七字を指すのであり、眞言はいろは歌で、四句とは

『涅槃經』の四句の偈——即ち諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂の四句の偈を指したものであるから、大師は、いろは四十七字を作りまた、いろは歌をも作つたのであると云ふ證據にします^(三)。小杉博士なども同説らしい。けれども私が見る所では少々違ふ。此の字母と云ふのは、いろは四十七文字を指したのではない、サ、ン、ス、ク、リ、ツ、ト、即ち『悉曇字母並釋義』の字母なる梵字を指したものであつて、大師は此の悉曇の字母に依て三乗を弘めたものと解する事が穩當であらう。又真言述四句の四句も、必ずしも『涅槃經』の四句と見る事は出来まい、何せかと云ふと元來此の贊語は當時流行の對句法を用ゐたものであつて、初句に三乗と云つたからして、「いろは歌」などに思ひ合せて四句と云ふ語を用ゐたものだらうと見る事が出来る。「いろは歌」を真言と云ふ事も何だか變な様であつて、牽強附會の説の様に見受ます。現に夫の柳原芳野などは四句の偈といふは偈陀は孰れも皆四句づゝであるから、真言演四句は梵語で偈を演べられたといふので、字母が悉曇の字母である如く、真言も單に梵語であると言つて居るが、是は思ひ切つた説ながら俄にうけとれぬ^(三)。小中村博士も矢張真言をいろは歌に見られ

て居たらしい^(四)。何は兎もあれ、いろは歌は弘法大師が作られたのであらう。之は頼阿法師の『高野日記』にも見えて居て昔大師が高野山をお營みに爲ります時に、大工共が文字を知らぬから木割をするにも符調を付ける事が出来ぬ、其處で弘法大師が、「いろは四十七字」の歌を作られて、木の切口を合されたんだと云ふ^(四)。此の説でもどうやら變なものです、斯く言へば別に確乎たる證據はないが、通例弘法大師が涅槃經の諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂と云ふ四句の偈を取つて、三歳の兒童にも解るやうに、いろは歌を拵えられたと見るのは、之れは宗教と教育との合體する道を率先開拓されたのであつて、大師の偉大なる功績でございます。況んや先程言つた通り五十韻圖を拵えられた事に於ておやである。

尙ほ普通教育に關して言はなければ爲らぬのは、維新前の寺子屋では先づいろは歌の平假名を習ふと、次に片假名を習はす。而して其の次には私の國などでは、苗氏付「名頭」と云ふものを習はせた。其次に習つたのは『商賣往來』で、それから『實語教』『童子教』など云ふものを習はせた。所で此の『實語教』と云ふものは、大

師のお作だと云ふことに爲つて居る。確か文學博士佐藤誠實と云ふ人の『日本教育史』の中にも、『實語教』の事は早く載つて居ます様で、其の書名は『大般若經』の實語品に出たらうが、併しこれは大師のお作ではないらしいです。其の初めの句に山高故不貴、以有樹爲貴とあり、其の次に……今度は私に都合が好いが……人肥故不貴、以有智爲貴とある、私の春は太だ低い、之れでも五尺一寸近くはあるのじや、新聞に四尺其處々々じやと云ふのは、それや餘り甚い、(哄笑) 人肥故不貴、以有智爲貴、これは大變都合の宜い話であるのじや。併し此の本をソロソロと開けて行つて見ると、何うも對句がお大師のお作としては太だまづい下手と謂はなければならんだ。(笑) 所で私は穿鑿好きだから、ホッホッホ穿鑿して見ると、足利氏の頃より徳川氏の初に涉つて、人の好んで讀んだのは『文章軌範』唐宋八家文ではなくて、寧ろ『古文眞寶』と云ふ本である、此の『古文眞寶』下の卷の銘類の中に唐の劉禹錫が作つたのがある、其中に山不在高、有德則名水不在深、有龍則靈と云ふ對句がある、之れは如何にも『實語教』の山高故不貴、以有樹爲貴、人肥故不貴、以有智爲貴と能く似て居る、其處で何うも此の『實語

教も大方『古文眞寶』から出たものらしい。殊に『古文眞寶』は宋の黃堅の選で足利時代日本へ來た本であるとすれば、『實語教』も恐らく同時代の作であらうと思つた。斯くて私は『實語教』は全く弘法大師の作ではないと斷定するが、さう云ふ書物までも、大師の作じやと云つて傳へらるゝのを見れば、如何に大師が普通教育に關係があり功績があるかが解るでせう。之れも私共がホセくつたのでいよく、大師が普通教育に効果がある事が反證せられたと思ふのであります。

第八章 經濟上に於ける弘法大師

以上述べたので大體のお話は済んだが、尙ほこの外弘法大師が政治上に於ける事業として、傳教大師などと力を盡された事がございませう、嵯峨、淳和、仁明、三帝の御信任を得て宮中にも數々出入せられた事でございませうから、宗教以外に政治上の事にもお教へ申し上げた事があるだらうと思ふですが、之は能く解りません。

但し經濟の一義に至つては、又弘法大師を推さなければなりません。今までのお話は宗教とか文學とかで金儲けとは縁が遠い、即ち今日の所謂實業とは少しも關係がなかつたが、尙ほ其の當時に在つては實業の方でも弘法大師は魁の一人だと存じます。何せかと云ふと、御承知の通り今日の實業は兎角商工藝の事を盛んにするにあるが、昔の實業は農業であつた。で農業と弘法大師との關係は至極親密であつたと云ふことは直ぐ解る。元來農業と云ふものは水が第一で、即ち灌漑をしなければ爲らぬ、所で大師は此の灌漑といふ事に非常に盡力

なされました。其の一例を挙げると、大師は弘仁十二年に讃岐國に下られて、即ち其の郷國に赴かれて、夫の大きな満濃の池を掘られました。そりや大きな池です。近江の琵琶湖は人が掘つたんでない、あれは富士の山がポコッと出来て、それと同時に片一方に湖が出来たのださうなが、(笑) 夫れは神力佛力として置いて、満濃の池は正しく大師が掘られたのだが、併し池と云つたとて小さい池と思はれては違ふ。讃岐には湖水がない、吾々讃岐の人間は小供心にも湖水があれば宜いと言ふて居たが、讃岐には山も川もあるけれども湖水はない、併し満濃の池は實は湖水程あるで『今昔物語』にもさう書いてある。夫れを何せ池と云ふかといふと、あれに百瀧か、つたら湖水に爲るのだが、九十九瀧しかない、猿は三本毛が足らぬによつて人間に爲れぬと云ふのと同で、(笑聲盛におこる) 満濃池は一瀧足らんによつて湖水に爲れぬと、所の人達は申すさうなが、兎に角其の大きな池を大師は拵えられたのです。併し今日も猶ほ郡民は其の恩澤を蒙つて居るのであります。又弘仁の十三年即ち其の翌年に大師の指圖で大和の益田の池の普請が始まりました、尤もそれは嵯峨天皇の時に始まつて、

後ち淳和天皇の時に出來上つたので、大師自作の益田の池の碑が立つた。これは『性靈錄』の中に歴々と載つて居る事ですが、之にも私は多少の説がある。抑々此の益田の池と云ふものは碑文は勿論大師が書かれたものですが、池は大師が鑿られたとは云はぬ。併し私の見る所では恐らく弘法大師は池の設計に關係せられたのだらうと思ふ。そりや又何うして解るかと思ふに、證據のない事は言はぬ……碑文が證據である、即ち池を拵えた時の奉行は、藤の納言三守、紀の太守末等と云ふ人が奉行に爲つてやつたのだが、其處に又設計者として圓律師と云ふ名前が書いてある。其處で私は此の圓律師と云ふは何者であるかと段々取調べて見ましたが、全く弘法大師のお弟子で、而かも此の東寺の沙門の圓律師の事であることが解つた。さうして見るとお師匠さんの弘法大師は、先年滿濃池をお鑿りに爲つて經驗がお有りなさるで、屹度お指圖を願つたに違ひないと思ふ。即ち間接には大師のお指圖で益田の池は出來たのである。併し此の益田の池は……大和の人が下ないに天狗に爲つても……湖水程ではない、碑文は幸ひに文章が後に残つて居るが、池そのものは今日は亡んで居る（哄笑）

お大師さんの滿濃の池は今でも残つて居るが、お弟子さんの圓明律師の池はいけなくなつて居る。何はともあれ此等で以て弘法大師が農業に關係せられて居る事は解るでせう。が、まだ夫れでも満足出來んと言はれるならば、まだくありませう。諸君の中には、貴方は先程から數々近頃高野山へ上られたと言はれるが、然らば高野山で何を見て來たかと問はれるでせう。私は今日は外の事は申す暇がありません、併し高野山で私が一番感心したのは……豫て承つた事だが……山林の立派な事です、高野の山林と云つたら實に立派なものだ。日本に山林は多いですが、高野へ御參詣に爲つた人は誰も此處のは格別立派だと云はれるさうです。私も駕籠に乗つて行つたが、途中何が綺麗だと云つても、樹木の立派なのに越すものはない。さて此の立派な山林は、誰が造つた、素より紀州は木の國と稱へて、往古から樹木繁茂の國であるには違ひないけれども、山林は誰が造つたかと云へば、矢張お大師さんがしたのでありますまいか。尤もこれは實際は中興の木食應其上人の經營せられたものが多いさうで、應其上人は固より豪い人ではあるですが、併し上人は恐らく大師の遺志を繼承して遣ら

れたものに違ひないと想ひます。して見れば大師は山林殖樹の事にもお力を盡されたものであらうと謂つても差支は無からう。固より短日月では出来まいけれども、何うか宗教と經濟と云ふ題目で、一つ誰かに取調べて貰ひたい。此の宗教と經濟の關係と云ふものを取調べるのは、固より容易の業ではござりませんが、随分面白い事であらうと思ふ。併しすれば大師の實業の方面に於ける功績は愈々明に認めらるゝでありませう。

さて諸君、以上述べました所が、我が國文明史上に於ける大師の位置と云ふ事なのでありますが、之れだけでまだ演説は濟まぬのです。(笑聲盛に起る)モウ何時だ、(時計を眺めて)斯りや大變じや……まだ之で演説は濟んで居らぬのじやが、今見た所がモウ五時に近い。正しく今までに早や二時間と四十五分お話したのじや、併し之れで七分通りは濟んだのです。が有難い事に、今までに欠伸が一つも出んのじや、斯りやお大師さんの冥護とでも申しませうか。併しまア餘談は擱いて、小用などに行きたい人もあるでせうから五分間許り休んで、後四十分か一時間位で纏めませうか？夫れとも、文明史上に於

ける大師の位置と云ふ本題は、モウ濟んだのじやから、之で擱きませうか？夫れとも五分間許り休憩して遣りますか？諸君に此處からお諮り致します、(謹聽々々の聲盛に起る、先生曰く)夫れじや直ぐ續けて遣ります。斯う爲つたら獅子奮迅の勢じや！(拍手喝采)

第九章 弘法大師の境遇

夫れでは引續いてお話致しますが、前にお話した所で以て大體文明史上に於ける大師の恩徳の高大なる事は解つたと思ひますが、諸君、此の高大なる恩徳も、若しやすくと出来た事でありましたらば、吾々は左程お禮を申さんでも宜いのです。所が實は右述べました事業が、皆大師が如何にも酷く御苦勞を爲さつて、而して始めて出来た事である事を想へば、吾々は茲に深く感謝の意を表さなければ爲らぬと思ひます、(拍手) 小子後生吾々の如き者が唯遊び半分の様に出来る事なら、御苦勞はなさらぬが、弘法大師は此の文明の輸入移植には非常な御困難を爲されました。先頃佐伯君は弘法大師は佛さんだからと云はれたが、佛さんだから何事も容易く出来ると宜いが、決してさうは行かぬ。と云ふものは此の支那に行くと言ふ事が、今から言ふと實に造作のない事にして、入唐する位は何でもないのです、私も先年支那の小口だけは行つたが、長崎から船に乗るとして、京都から出て、どんなに長うかゝつても一週間あつたら上

海へは行けません。大風が吹いても沈没する氣遣ひはない。時間通りに彼の岸に行けます。依つて弘法大師とても何も遠い西洋諸國へ行かれたのではない、僅か三百里か四百里位の所だから、斯りや容易い事であつたらうと云はれるが、夫れは今と昔とは時勢が違ふ。何程佛さんでもさうやすくとは行けぬ。此の入唐と云ふ事は、奈良朝や平安朝の時代には非常な面倒な事であつた。夫れは其の筈で、徳川氏の時に於てすら、江戸へ行くには水盃をした位ですから、大師當時には支那へ行くと言つたら、モウ生きて戻つて來るとは思はぬ位で、それ故支那に行くと言つたら、泣きの涙で行く。お願をかける、お籠りをする、そりや色々して九死一生の命掛けで行くのである。お大師さんも後世からは佛さんと云はれるが、其の當時は矢張九死一生の事を爲さつたのでございます。尤も之にも色々説がある相ですが……先づ大師入唐の事情如何にと尋ねて見ると、桓武天皇の延暦廿年八月に支那の方へ遣唐使を遣はすと云ふ勅命があつた。斯りや遣唐使の第十一回振りに爲りますが、其の大使には藤原葛野麿が任せられました、彼の國の書物には藤賀能と書いてありますが、藤原葛野麿のこと

あります。で矢張り水盃をして……其翌々年の四月に船を出した。難波津と云ふから何れ今日の大阪邊か神戸邊か恐らく尼ヶ崎邊から出たものでせう。所が其の途中風に逢つて船はナリ／＼バラ／＼に爲つて、海岸にうち上げられ、一行中には溺死したのもありました。其處で何うも致し方がないから一先づ京都に歸つて、天皇に奏上すると(四七)船がなくなつたからと云つて夫れで止めると云ふ譯にいかぬ、急いで船を造つて再び渡航せよと云ふ勅命である。其處で船が復々新に四艘出来ましたから、翌延暦二十三年の四月に船出をしました。此時に大師並に傳教大師も入唐の勅許を得て、一行中に加つたので、正使は矢張藤原葛野麿、之れは四艘の中の一番に乗つたが、それに大師も乗られたのでございます。第二番の船には判官としての菅原清公が之に乗つて、それへ傳教大師が乗つた。而して其外二隻の船が加はり、都合四隻で、四月に節刀を拜し五月に難波津を船出しました。而して九州を出帆したのは七月六日でしたが、今ならば四日か五日の所を非常の暴風に逢ひ、流されて三十四五日海上に漂ふて、今日の十倍餘もかゝつて、八月十日に爲つてやう／＼支那に着いた(笑)京

を辭してから七十日餘もかゝつたのだ。而かも夫れが當り前ならば明州と云ふ所へ着く筈だが……明州と云ふと今の浙江省の寧波の近所、上海の直ぐ南に當る所へ着く順序だが、途中暴風雨に逢つた爲め、ドエライ所へ行つたもんで、南方遙に福州の長溪縣と云ふ處へ着いた……長溪縣は臺灣の向ひに爲る、今の福建省福州の中である(四八)其處へ三ヶ月近くもかゝつて、やれ／＼と着いた所が、御承知の通り福州の觀察使の方では、當り前の寄泊地以外の港に船が着いたのだから直ぐに通す事は出来ぬ、何か國書でも持つて居るかと思ねたけれども、持つて行つて居らなんだ。其處で大師が筆を揮つて福州の觀察使に表文を出されると云ふとに成る。そうすると觀察使がそれを讀んで大に感心して疑が解けた(四九)併し餘まり澤山の同勢では困るからと云つて、馬三十四程用意しませうと云ふので、周旋して呉れた。一行は約三箇月間此處に滞留したから、大變長安の都へ入るのが遅く爲つたが、今はお骨折有難うと云ふ譯で、十一月三日に福州を立つて、十二月廿三日にやう／＼長安に入つて、五、六、七、八、九、十、十一、十二、大方八ヶ月もかゝり福州の滞留を差引きても百二十日餘もかゝつて支那の

都へ行かれたのです、今ならば世界を三遍も廻つて來られる。さて第二番の船に乗つた菅原清公、傳教大師の船は一向に行方が解らなかつたが、此の船は都合好く明州に着いて、大使大師の一行より先き十一月十五日長安に着いて居る。長安に入つて始て相逢つて、之はお先きに、途中御無事と云ふ譯で、互に相擁して泣いたと云ふ事であるが、そりやさだめて嬉しかつた事でせう。斯くて大師は長安に留る事二年で、歸朝の途に就かれたが、歸られる時は少し樂であつたと見へて、八月に出でて十月の中頃に二箇月餘かゝつて博多に着いた。大師の信仰者は此のたびは波切不動尊を船に載せて來たから、其のお蔭で二箇月位で歸られたのだと云ふが、併し私は失敬ながら之れを波切不動尊に歸する譯にはいかぬ、矢張大師がさう云ふ御苦勞をなされたと云ふ事を謝さなければ爲らぬと思ひますが……モウ一つは如何に大師が豪い人であつても何うも時勢と云ひ境遇と云ふものは、已むを得んものであつて、何程お大師さんでも電話も發明されなければ、輕氣球も蒸氣船も發明されなんだ。此の間も高野へ上つて見ると、道筋にズウ……と電線が架つて居る、之は妙じや定めてお大師さん

の時からあつたからと云ふと、「ナンノ旦那、お大師さんの時から電信が架つて溜るものですか、これは十年程前に架けたのです」と駕籠屋は云ふ、(笑)して見ると、お大師さんも宗教の方では佛さんで、大善智識であるが、矢張人間として見ると時勢より上に超える事は出来ぬと思ふ。其處で大師が斯く偉大な成功を遂げられたのも、畢竟餘程宜い境遇であつたからであるが、其成功せられたのも、善良なる先覺者があり且俊秀なる後繼者を得たから出来たので、佛さんだから容易に出来たと云ふ譯じやない、矢張酷く御苦心遊ばして出来たのである事を申して見たいのです。斯りや或は失禮に涉るか知らぬが、一つ大師の素性から研究して見ませう。

大師の俗姓は佐伯氏であり升。此處にござる文學士の佐伯僧正と御同姓である。併し其家系を調べて見ると、佐伯と云ふのに二つある様です……大變難しい話だが……皇別の佐伯と神別の佐伯とあつて、皇別の佐伯氏は景行天皇の皇子稻舂入彦命の後であると云ひ、又神別の佐伯の方は高靈彦神の後で即ち大伴連室屋の後であると云ふ、夫れは『新撰姓氏錄』に乗つて居る(五二) 所で普通は大師

は皇別の佐伯氏であるとするらしいが^(五三) 色々調べて見ました結果、私は神別の佐伯氏であると思ひ升。詳しい事は時間がないから省きますが、其の證據は『三代實錄』の中にある。それは當時佐伯直豊雄と云ふ大學の書博士があつて、其の一門の玄蕃頭眞持と云ひ、正六位上正雄と云ひ、既に左京の貫籍となつて宿禰と云ふものに成つて居る、之れは大體今日の子爵とか男爵とか云ふ様なものでせうが、弘法大師の父たる佐伯田公と云ふ人の一門は、まだ直であるから正雄眞持でさへも宿禰に爲つて居るなら、何卒弘法大師の叔父に當る此の佐伯豊雄にも宿禰の姓を賜はりたいと言つたを、中納言伴宿禰善男が上奏したことがあります^(五四)。兎に角佐伯直は上代は讃岐の國造であつた家柄でもありますから^(五五) 弘法大師も確かに名門の出に相違ないのです。夫から『和訓栞』などの説では、佐伯とはワア〜騒ぐ、即ちさへぐと云ふ事で、而して此のさへぐと云ふ事は、蝦夷の渾名と爲つて居たので、佐伯氏は元來日本武尊が東征の折俘虜とした蝦夷人の司と爲つて居つたことから起つたのじやさうであります^(五六)。尤もさへぐと云ふ言葉を野蠻人の事とするのは、或は妙に聞へますが、外國にも其

の例があつて、彼の日耳曼と云ふは矢張騒ぐと云ふ事で、野蠻の時に林の中に棲んで居つて常に喧しく騒いで居つたから、日耳曼と云つたのであるさうです^(五六)。然らば佐伯氏と云ふのは蝦夷人かと云ふとさうじやない、其の部落を治める役人です。兎に角大師時代迄は佐伯氏は讃岐の國造として立派な家柄であつたのですが、餘まり振はなかつた。併し其の同姓を言ふと、叔父に佐伯豊雄と云ふ書博士もあり、又玄蕃頭眞持もあり、正六位上の正雄もあつた。又大師の母方阿刀氏は饒速日命の後なる味饒田より出で^(五七) 又大師の母方の叔父さんは阿刀の大夫大足と云つて、伊豫親王家の學士であつた。斯の如く一家一門には書の博士もあり、大足大夫と云ふ學士もあつて、學者が揃つて居るのを見ると、餘程周囲の境遇が宜かつた事は、お解りにならうと思ひ升。

併しいくら周囲の境遇が好うても、習はんでは何事も出来るものでない。で、大師は子供の時から非常に勉強された。大學に入られて直講味酒淨成に『毛詩』左傳『尙書』と云ふものを習はれた……之れは一寸御注意申して置くが、之までの讀方はウマザケ淨成と讀むのであつて、石堂僧正から『御遺告』を拜借して見ても

振假名はさうなつて居るが、あれは實はウマサケではない、ミサケと讀むべきだらうと思ふ。何せなれば伊豫の松山市に味酒神社と云ふのがあつて、現にミサケと讀んで居るので分かる。で大師は味酒淨成と云ふ人に習ひ、夫からモウ一つは岡田の博士に『左氏春秋』を習はれた。夫から又佛學は石淵勤操僧正に求聞持の法を習はれたと云ふことで、即ち大師の様な豪い人でさへも、佛典の外に色々廣く外典の研究をせられたのであります……今の學生には概して之れ程の勉強はチツと難かしい様に思ひます……併しながら元來吾人が一番感憤激勵するには、何にか私淑する人物を標的とするが宜い。或は東郷大將は平素ネルンに私淑して進んだのじやなど云ふ者もあるが、大師の私淑された人は誰であらうか、私は恐らく行基菩薩に私淑されたのであらうと思ふ。其の證據は『行化記』と云ふものを讀んで見ると、大師がお若い時に播磨の方へ行かれた時に、或る百姓家の門前で托鉢に立たれた、すると中から一人の婦人が出て言ふのに、私は行基菩薩のお弟子の出家以前の女房であつたが、私の配遇が今から百年餘り經つと云ふと、キツと菩薩が此處に尋ねて來られるぞと始終云つて居ました

から待つて居つた。貴方が即ち其の菩薩であらうと云ふたさうな。人間と云ふものは斯う云ふ境涯で、斯様な言葉を聞くと案外發憤するものである。弘法大師も貴方は菩薩である」と聞いては、尙更發憤せられたのではございませうか。さて又大師一代の御事業と云ふものも、一人の創作に爲つたとは云へず、實は是も先驅になつた人があつたと云ふ事を言ふて見たい。夫のいろは歌の如きも、大安寺の護命法師と云ふのが、いろはにはへと是れまで作つた。「ちりぬるをわか」から後は大師が作られたのであると云ふ傳説がありますから、矢張先に遣りかけた人があつたと云ふ事も解る。また片假名の五十韻圖とても大師以前吉備大臣が作つたものであると傳へられ、又一説に依ると先刻申した對馬の尼法明が、「對馬いろは」として作つたと云ふ説もある。して見れば不完全ながらもいろは歌及び五十韻圖の種子は、大師以前にあつたものであつて、大師がそれを大成したものと云ふ事が出來ます。又悉曇とても強いて想像を廻らすならば、或は大師が初めて學ばれたものではなくて、其以前に多少の傳があつたものと思はるゝ節が必ずないでもございませぬ。且つ大師の梵語學、サンスクリッ

トの智識は大きな聲で言ふと或は失禮か知らぬが、後世の安然や葛城慈雲尊者など程ではなかつたと思ふので、固よりサンスクリットの學者としては、大師を以て元祖としても、其の進歩は後世の人に待つ所が太だ多いのでございます。私共の友人で今現に佛蘭西に留學して居る柳文學士は、近頃『梵語學』と云ふ餘程立派なものを拵えられたが、斯う云ふ書物は昔では出来なかつた事でありませうまいか。柳君が此れを出版する事に就ては、今日はお出でに爲つて居りますか何うか存せぬが……仁和寺の土岐大僧正を始め其の他眞言宗のお方が色々御補助を下さつたそうで、其の書物も現に東寺の聯合中學の藏版に成つて居るのであります。して見れば私が昔の悉曇は左程十分のものでもなかつたと云つても失禮ではなからうと思ひます、此の事は聯合中學のお方には能く味つて戴きたい所であるです。

尙又『文鏡秘府論』の種本が解らんと先刻も言つた事ですが、夫れも實は解つたのです。抑々此の『文鏡秘府論』と云ふものに就きましては、支那人の楊守敬と云ふ人が、先年日本に来て居て、日本の古書を取調べて『日本訪書志』と云ふ書物を書

いたが、夫れを私は友人の内藤湖南君の所から借りて見たのですが、其の中に『文鏡秘府論』の事を舉げて、頻に立派な書物だと譽めてある。固より支那は本家の事であるから、本も總て揃ふてありさうなものであるけれども、支那に於ても今日唐時代の詩の作り方を見るには、此の本の上に出る事は出来ぬのである。議論には或は淺薄な所もあるけれども、兎に角唐時代の詩の事を知るには、此の上はないと非常に譽めて書いてある。諸君、夫れでは『文鏡秘府論』は全く大師の創作であるやうですが、前にも話した『詩人玉屑』の本の中に詩の病を書いた所に蜂腰體と云ふのがある否其の前からある。夫れが『文鏡秘府論』の中にも同じく第四蜂腰體と擧げてあるから、どうも種本があるらしく思ふた。其處で罪造りか知らないが、色々探つて見ると、どうやら斯うやら見當が付いたのです。夫れはな、多分王昌齡と云ふ人の拵えた『詩格』など云ふ本に據られたらしい。(王昌齡の『詩格』と云ふ本を基にして、其の他色々の書物を参考して書かれた者ではあるまいかと思ふのです。其の證據は『性靈集』の中に、大師が格別に此『詩格』を譽められた所が一ヶ所ある、即ち王昌齡の詩格と云ふものは私が在唐の

日に之を得て讀んだ所が、由來詩に關した本は澤山あるが、近頃一番の本は王昌齡の『詩格』であると云ふ風に書かれて居る^(六三)。大師さんは道に種本を隠しては居られん。王昌齡と云ふ人の『詩格』は宜い本でござると云ふから、大方それに基づいて書かれたのではあるまいか。尙他の書物をも參考にせられたのは勿論であるが、今日夫等の本は亡びて無いのです。而かも昔はあつたらうと云ふのは、大師入定後五十年頃に出來た『日本國現在書籍目錄』と云ふ本がある……其本を見ると「チャン」と『詩格』と云ふ本は載つて居り、尙ほ其の他色々詩の事を書いた類似の本が種々載つて居る^(六四)。それでそんな本は大師の當時には澤山現在して居つた事が解るから、多分さう云ふ本が種本に爲つたのだらうと思ふのです。併し王昌齡の『詩格』など云ふ書物は支那にも無いのじや、又日本にも無いのじや、唯だ幸に『文鏡秘府論』が残つてゐるのは、たとへば、傳承的文明としても、立派なものであります。恰も大乘佛教が今日印度に於ては已に滅亡して小乗教のみであるのが、日本には大乘が相應の地として今日猶繁昌して居るのと同じであらう。『文鏡秘府論』が残つて居るのは、大に誇るに足るものであらうと思ふのです。

第十章 弘法大師と奇跡

次には少々大師の奇跡に就て言ひますが、此の奇跡と云ふものに就きましては、信仰者の立場より見れば、神秘不思議なるものとしてありますから、別に詮索しやうなどとは思はれないのですが、何うも吾々が常識より見ると云ふと、此の奇跡と云ふものは、何も大師だけの獨有……極く失禮な言葉ですが……專賣と云ふやうなものではないらしい。今一つ諸君のお許しを受けてお話しませんが、彼の大師が清凉殿に於て諸宗の碩徳を集めて佛法を論じられた時、大師の辯論が誠に詳かであつたから、嵯峨天皇が誠に其の議論は能く解つた、併しながら證據を見ぬ事には話に爲らぬ、證據を見せよと仰せられたらば、大師は忽ち手印を結び、三摩地觀とかに入られたので、頭の上に五佛の寶冠湧き出で、五色の光明を放ち威容赫々たるもので、天皇も玉座をすべりて親しく之を拜し給ひ、諸宗の碩徳百官は座を起ちて禮拜されたとありまして、さう云ふ繪が書いてある事でありませう。斯りや『元享釋書』にさう書いてあるのです^(六五)。之

れも實は色々問答をされた結果皆々いたく感服して居ると云ふまでは奇跡でない。唯だ此の五色の光明を放ち云々と云ふのは奇跡だ。尤も之が『元享釋書』にあるからと云つてそれだけでは證據に爲らぬのです。と云ふものは此の本はお大師さんが死なれてから大凡五百年程経つて後醍醐天皇の時に出來た本である。今日三四百年前の足利氏や徳川氏の事さへ能くは解らぬのであるから、『元享釋書』でも其の出所を明記してない以上は、夫に就いて専ら論證する事は出來ないと思ふ。之れは失禮な話だが、まアさう云ふ奇跡の事を拜見する時は、吾儕信徒以外のものには、さう云ふ言傳へであると云ふより外に言ひ様はないと思ひ升。而してかう云ふ事はお大師さん丈ではない。『元享釋書』を開くと、外の祖師にも……傳教大師なども矢張五色の雲が舞びきて云々と書いてある。又夢告と云ふ様な事も澤山ある。彼の和氣清麿が宇佐八幡の神託を蒙つて、道鏡を矯めたと云ふ事も。矢張夢告げである。何うもお大師さん丈のものと云ふ事は出來ぬ。今日でも御嶽教會とか云ふ所では、神のお告げを蒙るとか何とか言つて居るさうな。夫れと大師のとは固より比較には爲るまいが、『元享釋書』の中には、

夢のお告げを受けたと云ふ様な話は澤山ある。何うもさう云ふ事にして見ると、他に類も多いのであるが。尙ほ奇跡の中で不思議なのは五筆の話だ。大師は口と兩手、兩足に筆を執つて、五本の筆で一度に書かれたと云ふ。其處で五筆和尚の稱號を得られたと云ふ事である。私は何うもさうで無いらしいと思ふて居たが、矢張昔からも之れを論じて居る人がある。夫れは八代弘賢と云ふ人があつて研究したさうである。其の人の説に大師の就いて習はれた師匠は、韓方明と云ふ人で、其の人の筆法に五法ある。即ち執筆、簇管、握管、撮管、搦管と云つて、大師の此の五筆悉く作られたから、五筆和尚だと斯う言つたんだらうと書いてある^{六五}。之れも信徒の方ではさうは言はぬが、吾々には五種の筆法に通じて居られたから五筆和尚だと云ふ方が、早う合點が行くやうだ。此の説は八代弘賢も言ふて居れば、又桂川中良と云ふ人の、今より二百年前に書いた『桂林漫録』といふ本の中にも述べてあります^{六六}。また彼の有名なる應天門の額を書かれた時に、應の字の上の點が落ちて居つた、何うも弘法も筆の誤と云ふけれども、應の字を書くのに點を落すとは思はれん。私の名はトメリと云ふです

が、富の字の點があつたり、なかつたりそれは兩方に書くけれども、應の字を書くのに點なく書く譯はない。尋常の人間でさへ落さぬものを大師ほどの方が尙更落しさうもない。で之れも抛筆と云ふ筆法で書かれた事の訛傳なのである。大師以前には抛筆では書かなかつたのを、大師が應天門の額を書く時に始めて此の抛筆の法を用ゐた。夫れを筆を抛つて書いたのだと傳へたものでせう。大師は決してそんな輕業をせられる筈はない、(笑) さぞ大師も御迷惑に爲る事だらうと私は思ふのじや、(拍手) 大師を尊敬して最負するのは好いが、さう云ふ様に最負の引倒しをせんでも、能く解つて居るだらうと思ふ。大師は決して驕慢な人でなかつた。動もすると驕慢など、言ふ者もあるが、元來大師は極く謙遜であられた様である。其の證據は「御遺告」を拜見しますると、豫て百年も生きて、教法を護持せんと思つたが、今や急いで世を辭する云々とあつて、大師も百年まで生きて此の法を護らうと思はれたが、無常の風が吹いて六十二歳で入定するで、弟子其後を引受けて呉れと云ふ事でありませう、お大師さんでも壽命には仕様の無いものと見へて、百まで生き様と思はれたのが、六十二で入定さ

れた。即ち斯う云ふ御遺告であつたのを、大師は今猶ほ高野の奥の院の廟内に眞に生きてござるのだと云ふ事に爲つたのはおかしい。尤も斯う云ふ信仰は弘法大師に限らない、そりや獨逸にもある、フレデリック、バルバロサは死してから後も矢張山中岩窟の裡に生きて居つて、國家に一大事が起つた時は、再び現はれて之れを救ふて呉れると云つた傳説もあるのだ。大師もチャンと奥の院に御座ると云ふ事である。併しお大師さんのお徳を言ふのには、夫れ程に言はずとも、肉體の大師は六十二歳で入寂に爲つたが、其のお徳は長く存して居ると云つた方が適確であると思ふのであります。又高野山を開かれた事に就きましても、……之れも或は太だ失禮か知りませんが、……色々の書物を讀んで見ると、高野山の松の木に何か光るものが懸つてある、夫れは支那から投げられた三鈷である、夫れは今も三鈷の松と云ふが歷々と残つて居るで、それを目當にせられたのだと云ふのですが、之れは矢張大師が夙に地理に熟して、高野山の一大靈地たる事を相したと云ふ方が、適切であらうと思ふ。「性靈集」によれば現に大師が表を上られた中にも、自分は幼少の時より好んで近畿の山川を跋涉したが

吉野に在つた時南に行く事一日、夫より二日にして一の平原を得たり、測るに佛寺を開くに適して居ると云つて居られて(六七)、遠く三鉢を投げて以て高野が神佛相應の靈場なる事を知つたとはお書きに爲つて居らないです。丁度傳教大師が天台山にて八舌論を見出して、智者大師の秘庫を開いたと云ふのと同趣異曲であつて、此の八舌論は國寶に爲つて、今も猶延曆寺にあるです。私は幸に昨年の夏拜見したのですが、此の三鉢の事と大體は能く似て居る。で天台宗の人は、イヤ八舌論は本當だ、三鉢は虚構だと云ひ、又眞言宗の人はイヤ八舌論は虚言だ、三鉢は眞實だと云ふ事に爲ると、水掛論であるですが、夫は言はぬ方が宜からう。私は大師が三鉢を投られて以て靈場を定められたと云ふ様な事を言ふよりも、前に言つた様に、夙に地理を取調べて居られて靈場を定められたのであると話した方が、誰も深く感心するだらうと思ふのであり升。尤も宗旨の方では奇跡として傳へられるのでせうが、何うか色々奇跡も、私の説く様にした方が、信仰上却つて効果が多くはあるまいかと思ふのでござい升。現に眞言宗の方では眞言秘密の法で雨請をしたり、或は雨を降したりするとか奇法があ

つて、夫れはお經文の中にもチャンとあるさうですが、私が先日高野へ上つた時は、珍らしいお天氣であつたのが、俄に風雨と爲つてなかく止まぬ、其處で大門の横で雨宿りして、偶々屋上を仰ぎ見ると避雷針が三本チャンと立つて居た……勿論昔は斯んな避雷針と云ふ様なものは立つて居なかつたであらうと思ふ、(笑)して見ると、私共から言ふと、佛さんと言はれるお方も矢張時勢や境遇の上には出られんものと見え升。

結 論

そこで以上説きましたる所を総合すると、弘法大師は大陸の文明を移植されて此の土に合ふ様に消化されました。而して其輸入は文化の一切の方面に於てせられたのだと云ふ事は、宗教家のみならず其の他孰れの者も皆悉く賛成する所であつて、西洋人と雖も拍手大喝采する事だらうと思ひ升。而して又大師が斯様な古今未曾有の偉功を立てられたのは、其の天稟非凡なるに因るのもあるけれども、お若い時から出来る丈勉強せられ、且つ支那へ留學せられて苦學

せられた結果であつて、實に其の當時の時代に於ては何處から見ても、道俗通じて時勢第一流の人であつたと言へる。諸君、此の時勢第一流の人であり、此の大抱負ある人にして、始めて一宗の開祖たるべき偉大なる人であり得ると思へば、今後何宗を問はず、又其の他何事を遣られる人でも、徒に古昔に復らん事を求めずして、寧ろ今の時勢に於て傑出せられ、弘仁天長の昔弘法大師が第一番であつた如くに遣られたら、其の事の成功して繁昌するは、猶ほ弘法大師と相違あるまいと思ふのです。(拍手) 此の間高野山の學林でも、一場の演説を需められたから、諸君がいや英語は入らぬ、獨逸語は面倒い、佛蘭西語もやめに仕様と云ふが、夫ではいかぬ、大師が若し今日の時勢に生れられたなれば、英獨佛は勿論世界各国の言葉を學修せられた事は信じて疑はぬ、されば諸君は大師の御遺徳と御苦勞とを思ふと同時に、將來に向つて進まれたならば、是れぞ即ち大師の御希望に協ふのであると云ふ事を申したですが、之れはやがて又今日の演説の趣意であるです。して見れば吾々弘法大師の恩徳を敬慕し、渴仰する者は、せめては大師が在世當時に於て盡されたる萬一だけでも努むべきではご

さいませんか。話が太層長く爲りましたから之れで擱きます。

最後に滿堂の諸君に對しては此の長い間の演説を靜にお聴き下された事を謝すると共に、尙ほ此の話を致しまするに就ては、石堂僧正より大師の遺著を多く貸與せられ、又先には高野山の密門管長を初め、鎌田大僧正其の他色々の人から町重なるお教を受け、御接待に預りました事は、遠い所からであります。厚く感謝致します。又参考書物は甚だ不十分でありながら、右様多くは石堂君より拜借致しましたが、尙ほ支那日本の事は大學の圖書館以外では私の畏友なる狩野君山、内藤湖南の兩君より愛藏の秘書を拜借致しましたる事をお禮を申述べます。尤も私の大師研究は之れで盡きたのではない、モウ少し取調べて居りますから申述べたいですが、時間が許しませぬから、他日を期しませう。速記録の末尾に引書目録など擧げて置きせうから、夫れを御覽下さる事を願ひます。定めて色々失敬の言辭もありましたらうが、其の邊はお聞直下さらん事を希望致します。何時間繞舌りましたか、(時計を眺めて) 只今六時十分だから、正しく四時間の演説であります。四時間の演説は私も遣り始めの遣り終りであ

らうと思ひます、定めし御退屈であつた事でせうが、之れで……。(拍手喝采)

日本文明史
上に於ける弘法大師終

○引用書目略

- (一) Jodl.....Die Culturgeschichtschreibung; ihre Entwicklung und ihr Problem. Halle 1878
- (二) 『大阪朝日新聞』第九千六拾號 明治四十年六月八日
- (三) 『日本書記』雄略の卷并に『新撰姓氏錄』山城國河内國等諸蕃の部
- (四) 『同文通考』第二卷并に『漢字三音考』
- (五) 『拾芥抄』中本『令義解』第一『職原抄』上
- (六) 『令抄』上卷註
- (七) 『延喜式』第二十卷
- (八) 『叡山大師傳』請求法譯語表
- (九) 『新唐書』汲古閣本第二百二十卷東夷列傳日本部
- (一〇) 『翻譯名義集』

Aitel.....Hand-Book of Chinese Buddhism

- (二) 『年山紀聞』第六卷并に『謨微字說』
- (三) 『假名の本末』下卷
- (三) 『同文通考』第三卷引用の『以呂波聲母傳』
- (四) 『和字大觀抄』上卷
- (五) 『東洋學會雜誌』(號數未詳)『皇典講究所講演』第百廿三號佐藤誠實氏『五十音考』
参看
- (六) 『文藝類纂』第一卷
- (七) 『本朝文粹』第七卷
- (八) 『日本書記』第十四卷雄略天皇七年
- (九) 『國華』第廿四號
- (一〇) 『古書備考』第七卷
- (一一) 『佩文齋書畫譜』第四十七卷畫家傳
- (一二) 『國華』第百九十八號
- (一三) 『源氏物語繪合』

- (一四) 『高野日記』吉野拾遺四卷
- (一五) 『東洋哲學』四十年二月『六大新報』第百八拾九號以下
- (一六) 『性靈集』第四卷
- (一七) 『尊圓法親王記』
- (一八) 『性靈集』第三卷
- (一九) 『學經室集』第三集
- (二〇) 同上第四卷
- (二一) 『執筆法』(屋代弘賢編)
- (二二) 『讀賣新聞』第壹萬七百四十八號 明治四十年五月九日發行
- (二三) 『宗教と教育との關係』六盟館出版
- (二四) 『性靈集』第十卷
- (二五) 『國華』第六十九號
- (二六) 『年山紀聞』第六卷『百家說林』(續編上)
- (二七) 『拾芥抄』等

- (三)『河海抄』第十二卷
- (三)『假字の本末』上卷
- (六)『文藝類纂』第一卷
- (九)『學士會院雜誌』明治二十年三月講演『古代文學論』等
- (四)『高野日記』
- (四)『日本教育史』上卷『圖書解題』
- (四)『今昔物語』三一
- (四)『東國高僧傳』
- (四)『性靈集』第二卷
- (四)『大和名所圖會』
- (四)『日本紀略』前編第十三卷
- (四)『日本後紀』第十二卷
- (四)『性靈集』第五卷
- (四)『異稱日本傳』上卷一

- (五)『新撰姓氏錄』第十二卷左京神別
- (五)『弘法大師廣傳』上卷
- (五)『大日本史』第二百七十三卷氏族志
- (五)『三代實錄』
- (五)『和訓栞』中卷
- (五) The Century Dictionary
- (五)『新撰姓氏錄』第十六卷山城國神別
- (五)『同文通考』第三卷
- (五)『日本訪書志』第二卷及第十三卷
- (五)『詩人玉屑』第二卷『翁註困學紀聞』第十卷
- (六)『性靈集』第四卷
- (六)『日本國現在書錄』に 詩髓腦詩格、詩體、詩病、文章儀式、文華要訣、文章式等見ゆ
- (六)『元享釋書』第一卷
- (六)『國華』第六十九號小杉博士『日本書法』

(尚)『桂林漫錄』(『百家說林』正論中)
(壹)『性靈集』第九卷

○大師著書類 (特に参考したるもの)

御遺告二十五條
遺告眞然大德寺
遺誠
再遺誠
附法傳
略附法傳
大悉曇章
梵字悉曇字母釋
即身成佛義

秘藏寶鑰
顯密二教論
十住心論
三教指歸
遍照發揮性靈集
文鏡秘府論
(弘法大師寶鏡錄)

○爾餘一覽したるもの

横井時冬著 芸窓 雜載
池田晃淵著 平安朝史
泰園撰 野山名靈集
小野藤太著 弘法大師傳
同上 眞言哲學

吉田東伍著 大日本地名辭書

『大日本史』中 佛事志 氏族志 神祇志

『群書類聚』本 寛平遺誠

『史學界』

陳 騷著 文 則

洪覺 範著 天厨禁衛

Histoire de l'Art du Japon. Pour l'exposition de Paris. 1900

○經典を一閱したるもの

瑜伽金剛頂經釋字母名

文珠問經字母名

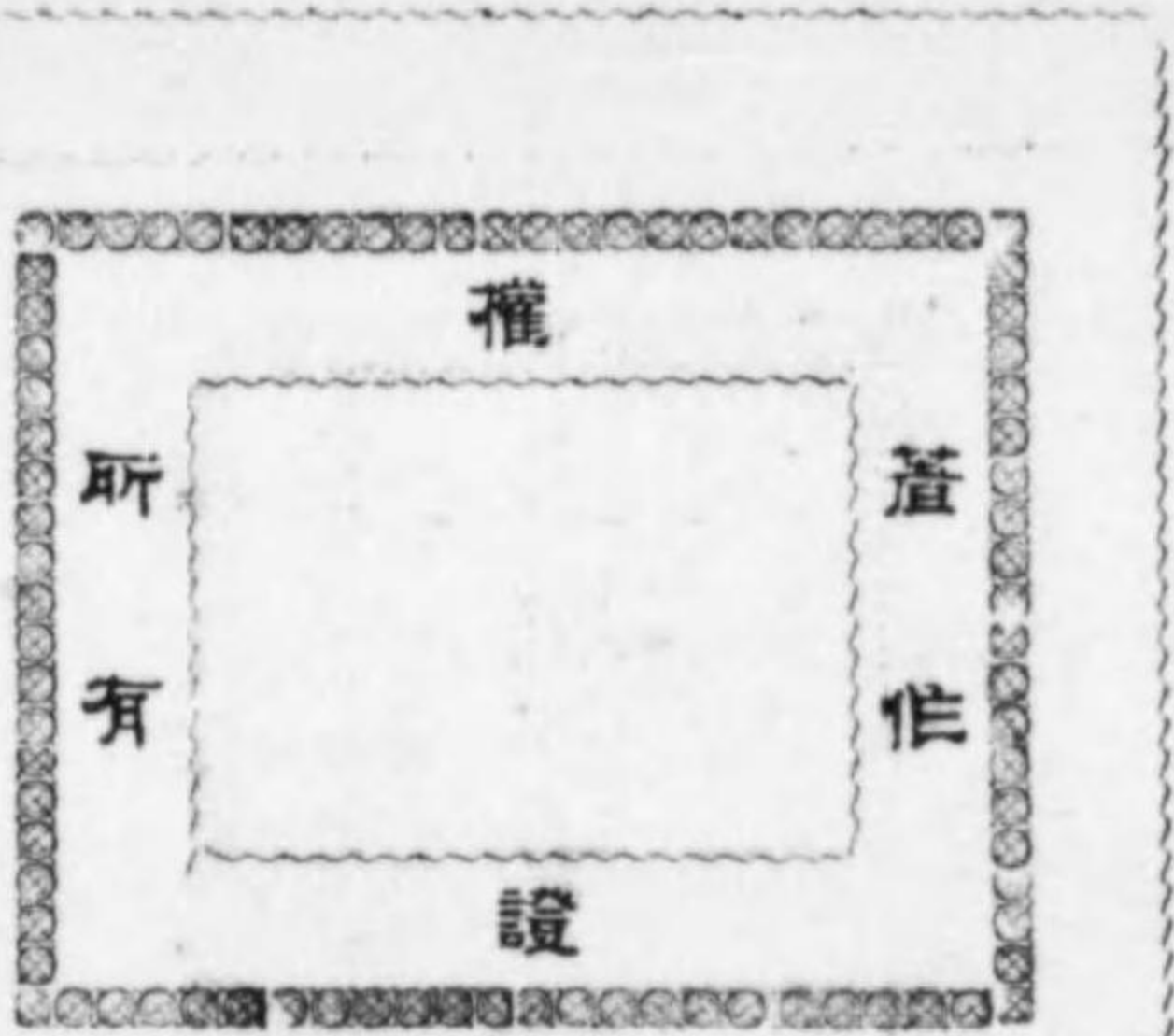
大毘盧那佛神變加持經

金剛光焰止風兩陀羅尼經

大雲輪請雨經 等

明治四十一年一月十五日印刷
明治四十一年一月二十日發行

弘法大師
定價金三拾五錢



著者 谷本富

發行者 東京市日本橋區鐵砲町三番地
合資會社 六盟館

右代表者 杉本七百丸

印刷者 東京市京橋區弓町二十四番地
高塚慶次

發行所

東京市日本橋區鐵砲町三番地
合資會社 六盟館

電話浪花二七六四番
探替口度二二五五〇番

18
785

合資
會社
六盟館
出版圖書
大販賣所

東京市京橋區
南傳馬町二丁目

目黑 甚七
電話本局二一六三番
振替貯金口座二八〇九番

東京市日本橋區
鐵砲町

榊原友吉
電話浪花三三三二番
振替貯金口座三〇九〇番

東京市日本橋區
本石町二丁目

杉本七百丸
電話本局一六九八番
振替貯金口座五六一三番

長野市櫻枝町

西澤喜太郎

長岡市表四ノ丁

目黑 十郎

8.9.25



18
785



18

785

017231-000-5

18-785

日本文明史上に於ける弘法大師

谷本 富/著

M41.1

ABE-0608

